

11年

第23回
戦争体験を語り継ぐ集い
戦時体験記録集《第18集》

昭和18年（1943）4月21日
戦時中の回覧板

現 知多郡武豊町富貴

資料提供 谷口氏 伊藤万平氏

敵機必来覚悟ハよいか
昭和十八年四月二十一日
各隣保班長殿
知多郡富貴村役場
富貴村防空防團

回覧板

此白シ今夜夜間、敵機奇襲の空襲が必スアリマス情勢ハ刻一、刻一、アル折柄、軍、縣、當局ヨリ、灯火準備管制、強化ニ用シ、敵重ルオ達シガアリマシタカラ、皆サシモ、分御注意シテ、人、違反者モ出サス様而テ、我カ御土防空ノ完璧ニ努メ、テ、度尚完璧ヲ期スニ、次、要綱ヲ、熟讀セズ、守リ、必ズ、實行シテ、下サイ、又、今夜夜中、時ニ、警防團員ガ、オ宅、ハ、廻ッテ、見テ、歩キ、若、違反シテ、居ル方ガ、アレハ、右、日、相當ノ、處、分、ヲ、受ケ、ネ、バ、マ、カ、ラ、充、分、注、意、ヲ、願、ヒ、マ、ス。

実施要綱

一 消燈シ置クべき電燈
門燈 軒燈 街路燈 神社用燈（指定存置燈）

二 屋内燈、内店燈

商ヒヲシテ、居テル方、店先燈ハ、下、園ノヨウニ、遮光シ、置キ、下サ

三 一般家庭屋内消燈

夜中何時空襲ヲ受ケルカ、モ、知レヌカラ、各家庭、比、自、サニハ、今、夜、半、午、右、十、時、過、キ、ハ、全、部、電、燈、ヲ、消、シ、テ、置、キ、下、サイ、未、ダ、皆、サ、シ、内、ハ、夜、中、見、タ、ト、電、燈、ヲ、ツ、ケ、テ、居、ル、方、ガ、ア、リ、ス、誠ニ、認識、不、足、モ、甚、ク、遺憾、ノ、至、リ、堪、シ、今、夜、絶、体、サ、キ、様、願、ヒ、マ、ス

四 ツ道具ノ整備

マ、防、空、ツ、道、具、ノ、揃、ッ、テ、居、ナイ、家、庭、ガ、澤、山、ア、リ、マ、ス、大、至、急、整、備、シ、置、キ、イ、サ、テ、去、ル、時、ニ、直、グ、回、シ、達、ア、様、不、足、ノ、モ、ハ、直、チ、ニ、整、備、シ、テ、下、サイ、変、シ、整、備、シ、置、キ、イ、サ、テ、去、ル、時、ニ、直、グ、回、シ、達、ア、護、レ、國、土

（手通シ下ル）

一 日 委 員 会
タ 2 月 実 行
セ 7 年 集
習 3 年 集
学 2 年 集
涯 生 成 緑
生 平 緑
こ 日
と 月 戦 争 体 験

発売刊の三冊 菫

今年には太平洋戦争《昭和十六年（1941）十二月八日〜昭和二十年（1945）八月十五日》開戦から七十年の大きな節目となりますが、昭和六年（1931）九月十八日、日本軍が自作自演で起こした満州事変が第二次世界大戦《昭和十四年（1939）九月一日〜昭和二十年（1945）五月七日》の導火線と位置付けしている近現代史家もいらっしやいます。

太平洋戦争は三年八カ月の後、日本全土を焼土と化し敗戦の憂き目にあいました。年齢的にこの間を中心に体験した記憶をここに「投稿」・或いは「語り部」としてご参加いただいた諸兄弟には、逡巡のすえ思い切ってご参加くださった方もいらっしやると思います。

平和を願い求められる皆様のお力で、戦争体験記録集・第十八集を刊行できましたことを心より感謝申し上げます。

目次

解説・表紙と国会議事堂	伊藤 万平	1 頁
証言・それは尊い平和の働き	後藤 正史	2 頁
レジュメ 騙されたらあかん		
― 祖母の強いことば ―	語部 青山千鶴子	3 頁
レジュメ ピースあいち・との出会い	語部 小島 久志	4 頁
レジュメ 戦死より病死の多かった中国戦線	語部 伊藤 芳雄	5 頁
レジュメ 名古屋空襲と疎開と		
生涯後を引く戦争を憎む	語部 速水 民子	6 頁
レジュメ 名古屋での空襲体験		
― 生き残った母子二人 ―	語部 井爪 光子	7 頁
レジュメ 知らなかった		
（隠された）京都の空襲	語部 斎藤 田	8 頁
私の戦争体験	伊東千賀子	10 頁
出 征	大野 文也	11 頁
真夜中火の海を父の誘導で助かる	澤山 昭八	12 頁
新聞投稿 抑留謝罪機にロシア見直す	橋詰 四郎	14 頁
棄民のあしあと		
戦争が終り世界が日本が平和になってから	夏梅 誠一	15 頁
三人の大元帥に翻弄された私の青春	橋詰 四郎	37 頁
引揚げ 二話	佐藤登代子	41 頁

解説 表紙と国会議事堂

伊藤 万平

老友、谷口氏のご尽力で昭和十八年（1943）村役場から地域住民への公文書「回覧板」を「第23回戦争体験を語り継ぐ集い・戦時体験記録集」に相應しい「表紙」にすることができました。ありがとうございます。

戦争遂行上日本の隅々にまで人心を軍国主義へ徹底さす目的で、向う三軒両隣の「回覧板制度」は、戦争が終わったので廃止した地域もあります。

回覧板の日付に注目したいと思います。この一年前の四月十八日、日本の近くまできたアメリカの航空母艦からB25爆撃機16機が日本を最初に空襲。内2機が名古屋を空襲しました。負けいくさになり、守るだけになっていった一つの証として「回覧板」をとらえてください。

回覧板は汚れ具合から、当時の手近な印刷方法ガリバン刷りと思います。使われている文字「カタカナ」が主流でした。学校教育は全国同じ国定教科書で現国語Ⅱ読本「カタカナ」から学びました。「ハナハトマメマス」「ススメスメヘイタイスメ」「キグチコヘイハシンデモラッパヨ クチカラハナシマセンデシタ」など。習字で最初に書いた文字は「ノメクタ」でした。

漢字も現在と違う文字が使われています。

縣Ⅱ県 當Ⅱ当 燈Ⅱ灯 讀Ⅱ読 實Ⅱ実 團Ⅱ団 圖Ⅱ図 醫Ⅱ医 學Ⅱ学
文中文字「商ヒ」は今の書き方では「商イ」となります。以上雑学まで。



合成写真ではありません。食べるものがない、国会議事堂前広場も畑にしました。写真は戦一年後の6月さつまいも畑の手入れ中と説明あり

証言

それは尊い平和の働き

私は親や兄弟姉妹を一夜にして失う、筆舌に尽くしがたい空襲体験を語った方の証言（二〇〇四年六月、岡山教会）を忘れることはできません。証言なされた方は娘さんとお孫さん二人を伴って来られました。「ずっと心の中につかえていた、重苦しい思いを家族のみんなにしっかり伝えることができ、犠牲者へのほんとうの供養ができました」と証言後、涙ながらに話してくださいました。証言に耳を傾けていたわたしたちは感動に打ち震えました。

証言という働きの中に、平和を求める確かな望みと決意がすでに含まれていると思います。証言者は単に個人の体験を語っておられるのではなく、戦争で命を奪われた方々に代わって、彼らの無念の思いをも語ってくださいます。戦争証言はまた一人語りではなく、その人の体験を多くの人々に伝えたい、同じようなことを繰り返してほしくないという望みに貫かれています。そのとき、まさに証言者の皆さんは犠牲者（証言者自身もその一人）たちとその体験を持たない後の世代の人々を平和の輪で結び合わせてくださいます。とはいえ、思い出したくない出来事を話したり、書いたりするということは実につらいことでもあったことと察します。このたび、証言を寄せくださった方々に感謝申し上げます。戦争を体験された方々のお働きに今後も期待しております。

一方、アジアの国々にとって日本という国はかつてよろいかぶとに身を固め、暴虐を働いた天皇の軍隊の国でもあったという歴史的な事実を忘れ去ることはできません。マニラ（フィリピン）のEAP I（東アジア司牧研究所）で二〇〇〇年八月十五日、被昇天祭の日、お祝い日だとういうことで昼食時、ビールが出ました。みんなで「被昇天おめでとう」と乾杯し終わって思ったら、インドネシアからの司祭、シスターが前に進み出て「独立おめでとう、解放万歳」とまた乾杯し、それからアジアのいくつもの国々の「おめでとう、万歳」が続いたのでした。日本が無条件降伏した日、いわゆる敗戦の日がアジアの人々には独立記念日、解放記念日なのでした。

この証言集は単にこんな大変な悲惨な時代があったのだという記録集にとどまることなく、日本の犠牲になられたアジアの人々（約二千万人）日本人の死者（約三百十万人）日本と交戦した連合国兵士（約六万人）二千三百十六万人を死の淵に追い込んでいった戦争に対する追悼、供養の祈念碑として、また不戦の誓いの碑となることでしよう。

まず、私たちは証言を読んで、痛み・苦しみと平和への思いをしっかりと心に刻みましよう。そして神様の与えたもう私たちのいのちを大切にしたい、この大地を武力の血で汚すことのないように、私たちの弱さを知り、いつも助け導いてくださる神様に信頼を寄せて平和のために共に力を合わせて生きていきたいと思います。

広島市中区幟町

カトリック 世界平和記念聖堂
司 祭 後藤 正史 神父

騙されたらあかん！　―祖母の強いことば―

語り部　青山千鶴子

私は昭和十四年（1939）生れ七十二歳です。戦争の恐ろしさは真夜中防空壕へ逃げた事位ですが、戦後の暮らしや厳しかった祖母の強い言葉は私の生き方の原点です。昭和十九年（1944）の夏、自営業の下駄屋で三十五歳の父に召集令状がきました。家族は祖母と母二十五歳、第三歳、妹生後二カ月、私五歳の幸せな家族でした。写真館の都合で家族写真が遅れ、その中に父の姿が納まらずアッと言う間の出来事だったと聞いています。その年の冬舞鶴の連隊へ面会が許され家族で行きましたが、面会時間が短かったのか父に抱かれたのか、何を話したのかは記憶にありません。そして翌年四月、私は小学一年生になりました。集合写真の後、私一人写しを祖母がお願いして、その写真に私のカタカナの手紙を添え舞鶴の父に送りましたが、父は戦地へ向かった後で送り返され、写真と手紙は父に見て貰うことができませんでした。送り返された写真は今も手元にありますが、私が書いたカタカナの手紙は母と祖母の涙でボロボロになり、今はもうありません。

昭和二十年（1945）八月十五日戦争が終り、父が帰って来るものと思い、家族がなんとなく明るかったような気がしました。が、その冬に戦死公報が届きました。祖母は私達子ども三人を、お仏壇の前に座らせ「お父さんはお国の人が連れて行って、他の国で死んだ」と、いつもより恐ろしい表情で話しました。母と祖母は涙はなかったと記憶しています。実は、昭和二十年五月十三日にフイリッピンのルソン島で戦死でした。戦が終わるたった三カ月前でした。遺骨も遺品も何も無く、紙切れ一枚だったそうです。

それからの母の苦労は、一年後に過労で肋膜炎を患い長期間入院してありましたから大変だったと思いますが、母も家族五人の命を守ることで精一杯、母から苦労話を聞いたことがありません。干物やワカメ、海苔などの行商をし、お米や卵と交換して生計を立てておりました。鉄道を利用し行商をしていました。鉄道の車内も警察がヤミ米の取調べをし、汽車の窓からヤミ米を外へ投げ、次の駅で降り急いで投げたヤミ米を拾う事も度々だったと、祖母が聞かせてくれました。

祖母の「騙されたらあかん！」の言葉は二度ありました。戦争遺児を靖国神社へ連れて行く話が学校からあり、私も弟も汽車に乗って東京へ行けると喜んだ時、「騙されたらあかん！お父さんはそんなところにはおらへん」と。もう一度は村の芝居小屋で戦争映画を遺族に見せると言ってきた時も、「騙されたらあかん！立派に戦ったと違う、無理矢理連れて行ったんや！」と、言ってる映画を見ることを許してくれませんでした。私と弟は意味も解からず、映画が見たくて大泣きしました。

戦後の苦しい生活は日本中みな同じことです。この頃の祖母の言葉「騙されたらあかん！」を、私はいつも世の中を見る時の道しるべにして今日まで、そしてこれから平和を求め続ける指針といきます。母も姑を大切にし、三人の子どもを育て上げ、孫や曾孫に囲まれて八十八歳の夏、亡くなりました。父を軍隊にとられてからの母は化粧も忘れるほど必死に働きいつも素顔でした。私は私の手で母の顔に化粧して「お母さん姑仕え、子どもを育て上げた手柄話をお父さんにして下さい」と話しかけ、お棺の蓋を静かに閉じ、父の元へ送り出しました。合掌。

ピースあいち・との出△云い

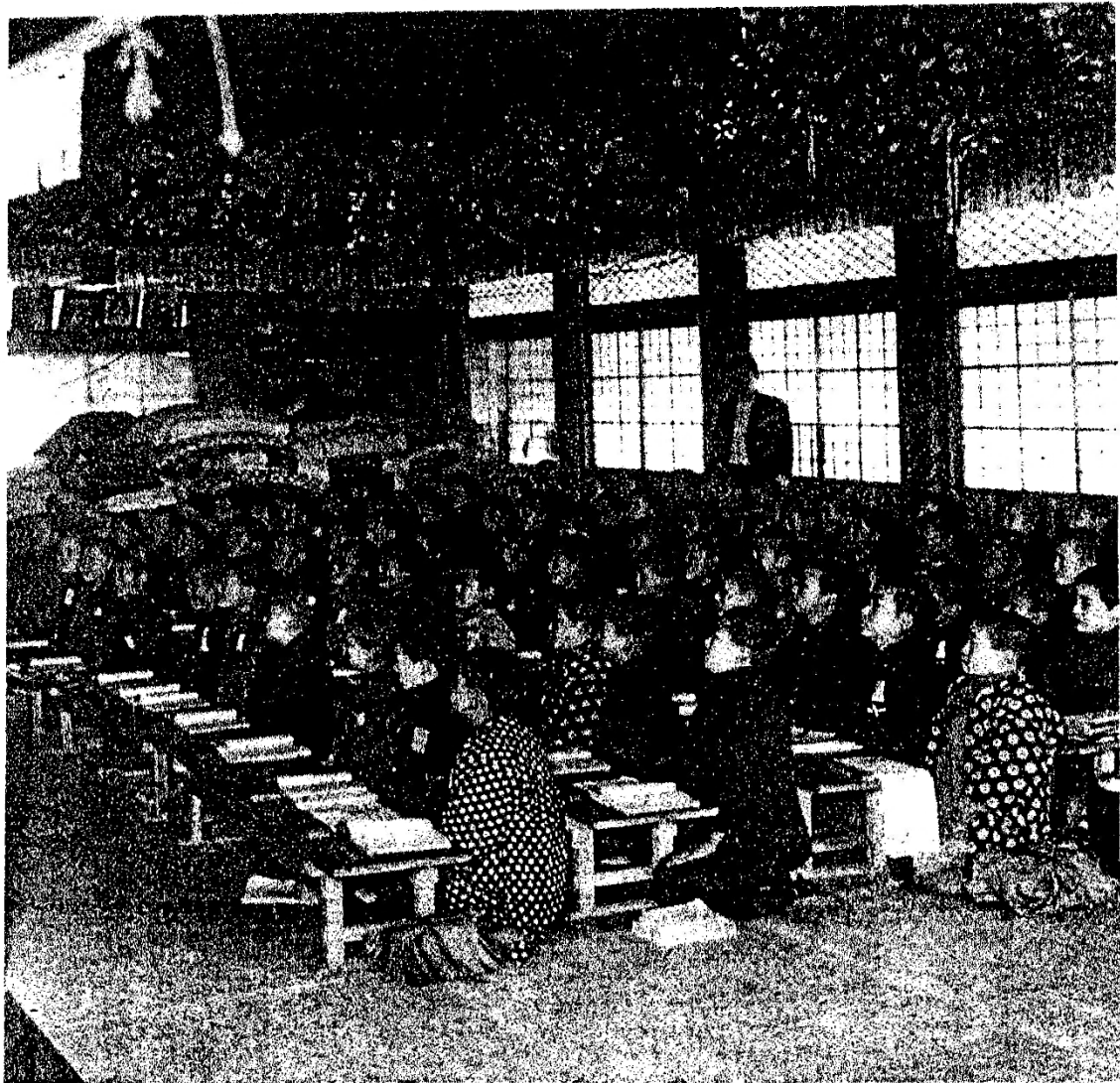
語り部 小島 久志

この写真は「ピースあいち」第三展示「戦時下のくらし」で出会った「学童疎開」三重県いなべ市覚通寺」での授業風景。名古屋市山口国民学校（現在旭丘小学校）の学童。前列手前から三人目が私。敗戦前年、昭和十九（1944）年十二月撮影です。

「戦争と平和の資料館ピースあいち」のボランティア研修の時、偶然と云うか奇跡のように戦後六十余年前の私との再会でした。お母さんと大声で呼び、甘えたい、泣きたい気持ちを子ども心に押さえ、我慢しての「わだかまり」も、写真と再会し少しは解け、平和活動へと進んでいきました。

今は、体験語り、展示ガイド、企画に向けた調査や資料集めなど、どれもみな同じ尺度で“命の重さ”“平和の尊さ”がより鮮明になって、私に出来ること、私にしか出来ないことと、意欲が湧き、健康で頑張ろうと心がけています。

六月四日はこの戦争体験の準備会で、レジュメ提出日でした。メンバーの一人が「小島さんお目出とうございます」と、私の母体「ピースあいち」が『戦争と平和の教訓を次の世代へ伝える』で表彰されると祝ってくれました。驚いた私は提出したレジュメを回収して、後の四行を書き添えました。



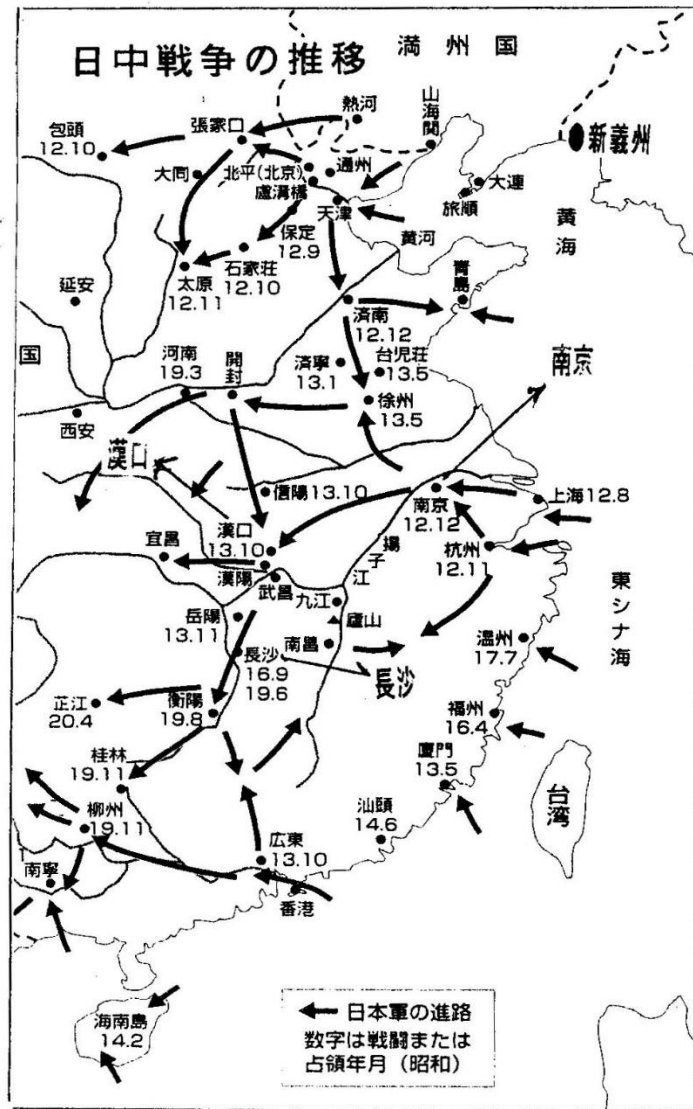
戦死より病死の多かった 中国戦線

語り部 伊藤 芳雄

十八歳で陸軍に志願し、名古屋の八部隊（砲兵六連隊）に入隊した。出征する時、熱田神宮に参拝。そして見送りの方々に挨拶「国の為、死を覚悟して行って参ります。残った家族をお願いします。」と、日本全国同じ、一律の入隊挨拶をする。

十九年三月、博多より釜山上陸。列車で北上、新義州を越え中国へ。南京より徒歩四キロ程の湯水鎮「中支派遣軍栄部隊砲兵教育隊」で約二カ月間厳しい砲兵演習訓練。その厳しさは、来る日も来る日も叩かれずめの苦しい毎日でも歯を食いしばり頑張った。早く立派な軍人になって天皇陛下に忠義を尽くしたいと志願したのだから、一期の検閲が終り、やれやれと思ったら私一人だけ中国最後の大作戦（湘桂作戦）参加を命じられ一週間後出発。船、列車を乗り継ぎ漢口まで。ここから長沙まで強行軍です。昼はアメリカ軍戦闘機による空襲なので、隠れたりして休息し、夜間行軍。道なき道を進む、雨が多く泥田の様な道をズブ濡れで歩くのです。

皆さんイツ・ドコで寝るか考えて下さい。泥田の様なぬかるんだ地面に直接寝たり、歩きながら寝るのです。当然眠れません、それが翌日に出て歩けないのに強行軍を強いられ、見る見る体力が低下してマラリヤ、赤痢に冒され死の行軍になりました。私は幸いにも愛馬青風に乗馬することが出来助かりました。人馬一体、命の恩馬「青風」の冥福を祈っています。地図は青風と歩いた中国！



名古屋空襲と疎開と 生涯あとを引く戦争を憎む

語り部 速水 民子

昭和十五年（1940）

日中戦争へ召集されていた父は二十九歳で戦病死。
明治憲法で、二十歳で徴兵検査を義務付けられていた時代。
二十九年の生涯のうち、成人してからの大半である八年間を軍隊
と軍属で、（お国のために）働いた。
父が亡くなったとき母は二十四歳、私は四歳だった。

昭和十八年（1943）

母は私を祖父母に預け再婚。

昭和十九年（1944）

戦地の母の夫は、決死隊（のちの特攻隊）として南方で戦死。
そのとき母のおなかには弟がいた。
高辻国民学校から学童集団疎開に三重県湯の山へ行く。

昭和二十年（1945）

名古屋空襲で昭和区東郊通りにあったわが家は焼失。
一週間後、身を寄せていた熱田区の叔母の家も空襲で焼失。
そのとき私は九歳で、空襲からのがれるため三重県湯の山へ
学童疎開をしていたが、体調を崩し自宅にかえされていた。

六十六年前の太平洋戦争末期、名古屋市の多くの家庭は、大人
も子どもも縁故疎開か学童疎開をしていたので、空き家が多かつ
たと思う。

私は二度も空襲爆撃を受けたのに、無傷で命拾いしたのは奇跡
としか思えない。

一度目は昭和二十年三月十二日。
雨のように降る爆弾の下、火と煙が竜巻を起こす猛火の中を鶴舞
公園へ逃げて奇跡的に命拾いした。

二度目は昭和二十年三月十九日。
名古屋市民は多くが疎開していたし、即刻、焼け跡などにつけ
たのは祖父と、私だったと思う。

名古屋で空襲体験 ー生き残った母子二人ー

語り部 井爪 光子

① 私の家族が住んでいた所

② 昭和二十年（1945）三月二十四日空襲前夜のこと

③ 爆弾投下 その時

④ 一家六名中四名の爆死と
その日の名古屋の空襲の記録

⑤ 残された母子二人のその時との後

⑥ 母に残った戦争の後遺症と
私の忘れられないもの

⑦ 東日本大震災と戦争と平和への思い

知らなかった

(隠された) 京都の空襲

語り部 齋藤 茁

★京都生まれ京都市育ちの私の中にある戦中戦後。

★京都の空襲

①最初の空襲 東山区馬町 昭和二十年一月六日 真夜中

②京都最大の空襲 上京区西陣 同年六月二十六日 朝

(隠されていた京都の空襲 1972年京都宗教者平和会議で公表)

★強制疎開

堀川通、五条通沿いなど。約二万世帯が建物疎開。

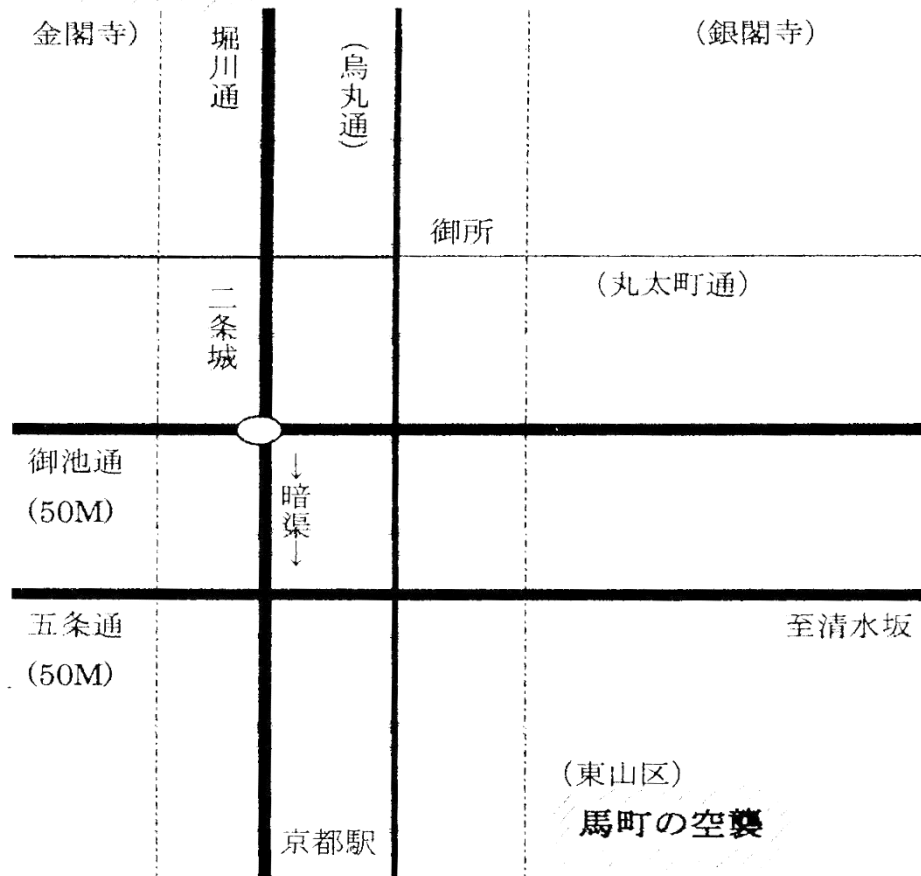
道路脇を防火帯、また消防道路として空き地に。戦前は幅十メートル以下の道路が、現在は堀川も一部暗渠。幅五十メートルの幹線道路として、近代都市に整備され、空襲の跡形を残さない《「隠されていた空襲」京都空襲の体験と記録、京都府立総合資料館、京都空襲を記録する会編集、汐文社発行、他京都府立総合資料館蔵書を参照》



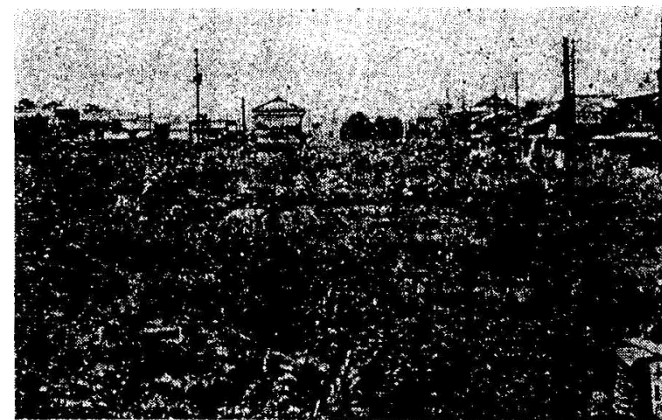
1946年ごろの堀川通(堀川御池から南を見る。



西陣の空襲（上京区）



西陣空襲被災直後のようす



中京区御池通の強制疎開あと

	地域	死者	負傷者	家屋被害	被災者
1945/1/16	東山区馬町	41	48	316	729
1945/6/26	上京区出水	50	66	292	850
京 都	全 体	302	561	756	1579
	30か所	312機	537	投下	

私の戦争体験

伊東千賀子

私は女学校の第五学年の一年間と敗戦までの五カ月間、学徒動員で三菱電機製作所塚口工場へ動員されていました。工場での仕事は航空計器等の製作をしており、私は「組み立て部」に配属されました。定計儀とか、水平儀とか飛行に必要な計器で、私は定針儀の組み立てをしました。空襲が激しくなると昼間も空襲警報のサイレンが鳴ると、仕事を中断して工場の建物を離れ、防空壕に避難しました。戦争末期には艦載機が軍需工場を目標に頻々と空襲するようになり、低空飛行で逃げる人を追いかけて機銃掃射をあびせるようになりました。

空襲下の工場に学徒をとどめていては危険と判断して、警戒警報発令と同時に学徒を帰宅させるようになりました。私は阪急塚口駅から二駅西の、西宮北口から通っていたのですが、警報と同時に電車はストップ。仕方なく線路上を歩いて帰りました。いつ戦闘機が飛んでくるか判らぬ不安に怯えながら武庫川にかかる鉄橋を、大事な大事な下駄を抱きしめ枕木一本一本を踏み締めて渡りました。周りに人影はなく、枕木の間から見える川の流れに目が眩みそうになったことが強く印象に残っています。夜も空襲警報の連続でおちおち眠っておれず、防空壕へ避難したり出たりを繰り返していました。が、燈下管制で真暗な夜空に照明弾が落とされ、周り一面が真昼の様になるく照らし出された事も忘れることが出来ません。

戦局がきびしくなるほどにお米や、小麦粉などだんだん少なくなり、ご飯の量を増やすためにトウモロコシや、豆かすと称した大豆の搾り滓を入れて炊いたものが主食でした。さつまいもの茎や葉、南瓜のイガイガの茎など食べられそうな物は何でも食べました。工場で時々販売される「黒パン」はパンとは名ばかりの臭いダンゴでしたが、度々買って空腹を満たしたものです。燃料の薪もなくなり一時間ほど歩いて山に行き、松かさや枯れ枝を拾い集め背負って帰って煮炊きをしました。辛うじて自分たちの体を維持できる限界の生活を続けながら、お国のためにと云う一心で働いたのです。

戦争中は本当に乱暴な時代でした。その中で私が一番許せないのは、純粋な若者を言葉巧みに洗脳したこと。特攻基地で同年代の男子が『ご両親様、先に逝く不幸をお許しください』の絶筆を見た時、胸が張り裂ける思いでした。平和が一番です守って下さい。

出征

大野 文也

赤紙がきました、召集令状です。行ってまいります。

母ひとり、子ひとり、好きなことに没頭して、結婚もせず三十代になっても、自活もできない大学助手です。母様には、苦勞の掛けどうして何事にも間に合わないまま今日に至ってしまいました。

母様に何かをと思いましたが、助手の身では何もしてあげられず。ご恩の万分の一もお返しできず、今こうして『陛下』に召されて行きます。

母様には「御身第一」身体を勞り、今は大変な時ですが、栄養を摂り養生をなされ、隣組の人たちと仲良く、くれぐれもご無理をなさらぬよう、長生きをしてください。

靴を履き、玄關を出ようとした時、待ちなさいと母の声。振り向けば母は正装し、玄關の上がりかまちに正座し、その前に一本の手拭いを置き両手をつき「どんなことがあっても、生きて帰ってきてください、卑怯者と罵られ、臆病者と後指をさされ、国賊、非国民と罵倒されても生きて帰ってきてください。お願いです生きて帰ってきてくださいませ。」と。

あとは声にならず、額を畳に押しつけ、背中を小刻みに震わせて。母様の背に手を置き、母様の涙の染み込んだ手拭いを握むと外へ。母様に涙は見せられない。『陛下』に召され山・野・海・空に散れば日本男子の本懐、一家の誉れで、おめでたい慶事の門出だから。

軍服を着せられ、人格を消され、銃を持たされ、その銃は『陛下』よりのお預かりした私の命よりも大切。銃を担いで隣国へアジア各国へ、南方へ人を殺すに行くことは日本男子のこの上のない痛快事であり、名誉です。一錢五厘のハガキで呼び出され『陛下』のために馳せ参じる喜び。

母様、ご安心ください。あなたの大切な一人息子は、『陛下』のためアジアの人を殺しませんでした。敵地へ向かうああ堂々の輸送船は、魚雷一発で海の藻屑に、私は『陛下』からお預りしている大切な銃を手放し、浮遊物にしがみついています。

うみゆかば みずくかばね おおきみの へにこそ しなめ

真夜中火の海を 父の誘導で助かる

澤山 昭八

真夜中から明け方までの数時間を、死ぬ思いで逃げ回った恐怖体験を話したいと思います。

昭和二十年（1945）三月十二日午前〇時過ぎだった「空襲だ！起きろ」父の声で私は飛び起きた。急いで非常袋を肩に掛け、綿入れの防空頭巾を被り外に出る用意をした。ラジオは「中部軍管区情報、潮岬南方海上を北上した敵機は、東海方面に接近中……」を、繰り返して放送していた。この時、私は十四歳、小学校高等科二年生で、今の昭和区福江二丁目に両親と三人で住んでいた。家族は他に二人の兄は兵隊で軍隊に、姉と弟は清須市に疎開していた。

警防団員の父は「お母さんと町内の防空壕に避難せよ」と、言い残し警防の持ち場へ走っていった。防空壕にはすでに十人ほどか避難していた。ゴォーと腹に響くB29の爆音が聞こえてきた。私は防空壕に入らず空を見上げると、日本軍の探照灯に写し出されたアメリカの空の要塞重爆撃機B29がこちらへ向かってくるのだ。大きな翼と長い胴体ははっきりと見える。と。胴体がピカッと光ると同時に、花火のようにパッと赤い火の粉が広がった。そして広がりがながらゴォーと不気味な音を響かせ落ちてくるのだ。火の粉が落ちた地上からはパッと炎と煙が上がる。焼夷弾を落としているのだ。

最初のグループが終わると次のグループと、波のように次々と現れては焼夷弾を落とす、燃え盛る名古屋の空を赤く染め、どんどんと広がって行くのだ。誰かが「あれは東別院辺りが燃えている」と言っていた。私はその時、東別院とは二キロメートルは離れているからと安心して、早く空襲が終わらないかと空を見ていた。私の場所から見ると、西方面が最初に燃え、次第に東へ延び北にも火の手が広がり、燃えていないのは私の背後南側、その先は名古屋港だ。心配になり自宅へ様子を見に行き、庭にある四斗樽の防火用水に近づいた時、頭の上でガァーと大音響の落下音が迫ってきた。私はとっさに持っていたバケツを頭に被り、その場に伏せると同時に練習した通り四本の指で目を、親指で耳の穴を強く塞いだのだ。トドンバリバリと複雑な轟音と地響きが地面から体に伝わり、静まるのを待ち立ち上がると、眼球も飛び出ず、鼓膜も破れていなかったの少し安心をした。目を母屋へ向けると屋根を貫いた焼夷弾が畳の上で燃えているのだ！。私は怖さを忘れバケツに水を汲み燃え盛ってい

る焼夷弾に思い切り掛けると以外と簡単に消えた。飛び散った火も消し外に出ると、隣近所から火の手が上がっていた。

そこへ父が戻ってきて「家は守り切れない、危ないから逃げる。防空壕から早くお母さんを連れてこい」と、言いながら家の中へ入っていった。私は防空壕の中に向かって「かあちゃん危険だからすぐ逃げるぞ」と、叫び、母と一緒に五、六人が出てきて、燃え盛る町内を見て「こりゃあかん、逃げる場所を塞がれている」と迷っていた。母と家に行くと、父が大きな米櫃と貴重品の入った箱を自転車に積んでいて「こっちから行くぞ」と、馬車屋の前を通り東側の四つ角へ出た。逃げる先の東西南北全部が煙と炎に包まれているのだ。父は力強く自分自身に言い聞かせるように「ヨシ精進川（新堀川）だ」と言いながら西へ向け歩き出した。

川まで二百メートルほどだが、風が強く、火の粉と煙が横殴りに飛んでくる。体を出来る限り低く俯きながら進んだが、なかなか川には着かない。とうとう立ち止まって前を見ると後十メートルほどで川岸だった。向こう岸（右岸）は川岸ギリギリに倉庫群が並び、岸に横付けした舢舨から直接荷を運び入れる倉庫群は完全に火の海となっていた。川岸の倉庫が炎に包まれ、燃え盛る倉庫群が次々と焼け落ちていく。火の粉混じりの熱風が渦を巻ながらこちら岸（左岸）へ吹き寄せてきて息苦しい。左岸は舢舨から石炭、煉瓦、など野積みが出来る広場があり道路を隔て問屋が並んでいるので右岸の熱風が諸に吹き迫ってくるのだ。「ここも危ない、北の方へ行こう」と、父は川端の道を川上へ歩き出した。左は川を隔て燃え盛り、右側の家々も炎に包まれているのや、窓から煙が出ている家が連なっている。少し進と、材木屋の立てかけてある大きな角材の群れが燃え上がり、桐の大樹も炎がアーチのように燃えている。父は「いいか、一気に走り抜けるぞ」と、スタートし、母も私も後に続いて走り抜けた距離は三十メートルぐらいだった。

父は「もう大丈夫だ、ここらは燃えていないぞ」と、大きく息をしながらゆっくりと歩き出した。今駆け抜けた道を振り返ると沢山の角材が一つの塊となって、道路へ燃え崩れるように倒れるところだった。父が走り抜けたためらっていたらと思うとゾッとして、父の決断力と行動力に助けられたと思った。丸太置場の横を通り中央線の踏切を越えると空き地があり、数人の避難者が腰をおろしていたので、私たちも休むことにした。

何時の間にか空襲は止み、B29の姿も見えなくなっていた。新

堀川の西側は猛火に包まれ、工場も、民家も燃え続け火はいっこうに衰えず、火の粉が強い火事風に乗って飛んでくる。だから、東北の方は燃えていないようなので、そちらへ避難する人達が紫雲橋を西から東へ逃れるのが見える。「小針の順一さんの所へ行ってみよう」と、突然父が言う。父の甥の順一さんが、小針小学校の近くでクリーニング店をしていた。店は鶴舞公園の近くで、私も度々行ったことがある。私達は中央線沿いに鶴舞公園の方へ歩き出した。

大津屋クリーニングはあった。順一さんは出征中で、お嫁さんの京子さんと三人の子が留守を守っていた。京子さんは突然迷い込んできた三人のために、朝ご飯を作ってくれた。その温かいご飯の美味しかったこと、そして、柔らかな蒲団に寝かせてもらい、私は「地獄で仏」とはこのことだと思ひながら深い眠りに落ちていったようだ。

翌日の午後、我が家の焼け跡を見に行く、強制家屋疎開で造られた広場から南は、遠くの方まで一面の焼け野が原になっていった。焼け跡の道は電線や焼け落ちた瓦礫で道が塞がれていて歩きにくい。空地のあちらこちらから煙が上がり、生暖かくて異様な匂いで、空気が漂っていた。通夜も、告別も、僧侶の祈りもない、空地での茶毘の煙と匂いなのだ。空襲の下は逃げ場のない物凄、地獄の戦場なのだと、思った。

1993年(平成5年)10月16日 土曜日

豊明市 橋詰 四郎 (無職 68歳)

来日したロシアのエリツイン大統領が抑留問題に就いて「非人間的な行爲を謝罪する」と黙とうされたのをテレビで見た。
私はシベリアからの引き揚げ者でも復讐者でもなく「生還者」だと思っっている。引き揚げは昭和三十一年十二月の興安丸で終了とされている。この間六十万人以上の日本人が、銃口の監視下で、酷寒、飢餓、強制的労働と苦闘しながら、ソ連の戦後復興のために賠

抑留謝罪機に ロシア見直す

豊明市 橋詰 四郎 賃金の肩代わりをさせられ、そこで死に、凍土に埋められ、生還者の証言もあって六万人以上と言われる。
平成三年、当時のソ連大統領が来日した時、抑留日本人の死亡数はモンゴルで五千五百九十人、七人を含め三万九千九百八十五人と発表した。このケタ外れの数の違いも今後の課題だが、モンゴルの分を除く、ソ連領内での公式死

カ棄民カのあしあと

★戦争が終わり世界が、日本が平和になってから
満州（中国東北）とシベリアで何が起っていたか★

夏梅 誠一

いささか旧聞になるが、敗戦から四十八年後の平成五年八月十二日付け新聞各紙は「敗戦時、旧満州に在留していた民間人・将兵捕虜百八十万人のカ棄民化カ計画が『大本営報告書』によって判明した」ことを大きく取り上げ報道した。それは「ロシア公文書施設で発見されたもので、同報告書によると、捕虜となった百八十万日本人をソ連指令下に移し、国籍離脱まで想定、現地に土着させ、事実上カ棄民カする方針を固めていた」と言うものだった。

旧満州で関東軍がソ連に捕虜の労役を申出た昭和二十年八月二十九日付文書も明るみに出て、大本営報告書に「全面的に同意」した関東軍参謀長の「所見」も同時に発見された。新聞各紙は「六十万シベリア抑留の伏線となった関東軍の労役申出は、日本の国家意志だった可能性が極めて強くなった」と報じた。

私は昭和二十年八月十六日、北満孫呉でソ連軍の捕虜となりこの時点で、今日が幾日で今の時間も剥奪された。孫呉は旧満州（中国東北地方）の北緯五十度辺りに在り、その北東を流れる黒竜江を境にソ連軍と対峙していた国境守備隊を統轄する第四軍司令部が駐屯する要衝だった。私がソ連軍の侵攻を知ったのは、孫呉北方250キロの山神府（サンシンフ）下士官候補者教育隊に派遣されていた八月九日早朝の点呼時、高い金属音を響かせた飛行機が上空を旋回していったそのあとだった。この時私の脳裏六月までいた第六国境守備隊の苦戦を想像した。ソ連軍の攻撃を三時間どのように防衛しているだろうか、そして全員戦死の玉砕を！。ソ連軍侵攻の報に兵隊達は緊張した、ドイツ降伏後ソ連は、戦車・重火器を続々とソ満国境に配備戦力増強し、わが国境守備隊は主要兵器、兵員の多くを南方戦線へ移動していたことを、ここに居る兵士達はよく知っていた。それだけに兵士のなかに重苦しい空気がただよっていた。

その夜兵舎に火を放ち、わが大隊は孫呉目指し南下した。断続する雨の中を歩きつづけ四日目の夕刻、小興安嶺山脈を背にした孫呉陣地へ到着、白樺や樺（くぬぎ）などが疎生する林の中で野営した。誰もが死を覚悟して（もう日本には帰れることはあるまい）という思いに唇を噛み、まんじりともしないまま夜明けをむかえた。早

々、私達はミグ戦闘機の爆音にはね起きた。ミグは陣地上空をわがもの顔に旋回し、顔が見える至近距離から機銃掃射を反復した。わが方は機銃と小銃で反撃するが、対空砲火が炸裂することは一発もなかった。

白夜の空が暮色に染まるころ、小隊に集合がかかった。教官だった見習士官は「わが小隊に挺身奇襲隊の命令が下った」と緊張の面持ちで言い、編成、任務を伝え傍らに置いた30センチ立方位の木箱を兵隊に持たせ「これが破甲爆雷である。順番に回すように」と言った。私達は、これが敵戦車に体当たりする日本軍の新兵器であると聞いてはいたが、実物を見るのは始めてであり、私はこの木箱を受取りズッシリと火薬の重さを感じたとき、動悸は昂まり、全身に恐怖が走った。

山神府出発以来、私の頭の片隅にはいつも「死」が居座りつづけていた。雨の中を居眠りしながら歩いて前の人にぶっかったとき、小休止でちょっとタバコに火を付けようとした一瞬にも「死」が頭をよぎり、振り切ることができなかった。しかし今、漠然とした「死」ではなく、確実な「死」の前に自分は生きていることを知らしめられた。ソ連の中型戦車でも擱座出来るというこの爆雷を次の者へと次々回した兵隊達の胸の内には純粹に「我一死、皇恩に報いん」などという志とは程遠い、私も他の者も五年以上も軍隊にいて何度も満期除隊を無視され、望郷の一念で今まで奉公し、いま目の前の破甲爆雷を抱いてソ連戦車と心中など受け入れがたい悔しさがにじんでいた。

八月十四日も豪雨、早朝廁の帰り草むらの中でハッとして立ち止まった。びよ濡れになった兵隊達がこちらへ歩いて来る中に、一緒に派遣されたKがいた。(挺身奇襲が始まっていたのだ)私は思わず身震いした。Kは目をギラギラさせながら「敵戦車の動きを捉え奇襲決行と命じ、各自導火線に点火しようとしたが、雨に濡れ点火不能で処置なしと引き帰った」と、早口に喋り指揮天幕へ報告しに行った。

翌十五日、久しぶりに良く晴れた。ミグは一機も姿を見せなかった。昨日まで絶え間なく響いたミグの爆音とドドッという機銃の唸り、バリバリドンの炸裂音が嘘のように静まりかえっている。兵隊達はびしょ濡れの軍服と体温で異臭を放つ衣服を脱ぎ捨て木の枝に吊るし、それでも裸のまま陣地を守る壕や蛸壺を懸命に掘り、来

たるべき地上攻防戦に備えていた。この孫呉陣地死守を命じられていた二万ともそれ以上とも聞いていたこの大部隊が、決戦を前にして一時的にも停戦など考えられず、ましてソ満国境の局地なのだ。

私は山神府へ派遣される昭和二十年六月初旬まで、第六国境守備隊歩兵十中隊で内務係准尉の助手をしていた。第六国境守備隊の任務は、捨石部隊で全員玉砕してでも三時間は死守せよ。で、この三時間は孫呉以南の関東軍の戦闘準備時間と言われている、転属で離れる時は一抹の寂しさもあったが、三時間だけの「死」の守備隊から逃れた安らぎもあった。営外（兵舎の外）居住者である准尉が帰ると、マル秘書類の綴り書類や新聞を読み、将校以上しか知ることの出来ない情報を一兵士として知る役得があった。

昭和十九年に入ると一月三十一日、米軍はマーシャル諸島のグエゼリン島とルオット島に上陸、守備隊六千五百人が玉砕。更に十七、十八の両日には連合艦隊の南太平洋最大の軍事基地トラック島が米空軍の大空襲を受け壊滅状態。しかし新聞報道は「我に必勝の信念あり、一億この難関に挺身せん、元寇以来戦火帝国領土に波及」と見出しで「不滅神州の一角に敵兵を上陸させ目下果敢な邀撃戦を展開しつつ……」というような記事ばかりから事実の推測は容易ではなかった。しかしガダルカナル以来の「転進」や「玉砕」記事が増える一方なので、戦況は日に日に我方に不利であることは、最果ての北満国境守備隊員の私にも本当の状況が伝わってくる思いであった。

二十年の五月十中隊に十六名の初年兵がきた。彼らは全員丙種合格の軍人には向かない体力の持ち主で、年齢も三十五、六のオッサン達で、商店主や病弱の家庭療養者を徴用工として軍需工場で働かせ今度は帝国陸軍に召集されたというのだ。我々が任せている「銃後」には「男」は居ず、子どもと老人と女の「銃後」とは言えない銃後の世相を垣間見た。しかしその年の二月、ヤルタ密約でスターリンが日本参戦を約束したこと、八月六日・九日に広島・長崎へアメリカが投下した「新型爆弾」の威力の前に日本の命運が決まっていたことなど、知る術もなかった。

八月十五日午後になって「戦争は終わったらしい」という情報が兵士達の間を駆け抜けた。「天皇陛下のラジオ放送があったらしい」とも流れてきた。「どこの情報だ」「司令部の兵隊達がそう言うって騒いでいる」私は、天皇陛下が直接ラジオ放送などと信じなかつ

た。命令を受領してきた班長が我々に命令を伝達した「：朕ハ帝国政府ヲシテ米英蘇支ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ：」を解説付で読み上げ、つづいて「我々は飽く迄御聖断に従い行動する」と関東軍司令官山田乙三大将の命令、中島第四軍司令官の命令を読み上げ、最後に「明十六日九時各小隊は所定の命じられた地点に集合せよ」と言う大隊長命令で結んだ。

この難解説付命令を各自が、それぞれの知識で理解しようと努力したようだ。私は聞き慣れない勅語、米英蘇支四国の共同宣言の中味は、日本はそれにどんな条件をつけたのか、集合させ一括伝達できるのに何故チョコチョコと最末端組織の班毎で分散伝達させたのか、解からないことが多すぎるこの「降伏」に涙を流すものは誰もいなかった。状況の急変に翻弄されていた私はふと、今朝方まで取り付かれていた「死の陰」が何時の間にかその呪縛を解かれたように消えていたことに気がついた。今日誰かに、私にかも下令されていたかも知れなかった挺身奇襲の命令はもう下りないと思った。

私達は「降参」という屈辱で死を免れたのだ。しかも決戦の前にした微妙な状況下で、帝国軍人として恥ずべきだか、天皇陛下の詔勅を体してのことであり憚ることはないと思ひ、捕虜の「汚名」をきることはあるまいと思ひたかった。それにしても軍人に賜りたる勅語で「死すとも降伏するな」と厳命しておきながら、兵が降伏する前にご自分が降伏するとは情けないとも思った。

この先はソ連兵に武装解除され捕虜收容所行きは確かだ。ソ連兵に虐待されるかも知れない。十中隊にいた時、巡回慰問のニュース映画でマレー半島で日本軍の捕虜になったイギリス兵がやつれ果て、小さな日本兵に銃剣で追い回されている場面を思い出し、今度は俺達の番かと覚悟した。これから先、どんな物を食わされ、どのような労働が待っているのか、それが自分に耐えられるか、どのぐらいしたら日本へ帰れるか、次々と不安がのしかかってくるのであった。

八月十六日も良く晴れた。昨日私達は日本の降伏を知らされ、明日から自分の運命に「命」も含めどのようなに關わるのか重苦しさで沈みがちであったが、それはそれとして、小川で垢にまみれた体を洗い、髭を剃り、洗濯もした。日没後も敵機も飛んでこないのので存分に火を焚き衣服も乾かし、とっておきの牛缶を開け、この陣地で最後の晩飯を食った。そして今日、十六日、軍人としての習慣か

るか武器の手入れに専念し、歩兵の私は小銃を磨き上げ軍装を整え
出発し司令部幕舎の前で停止。司令部付の将校が蛸壺にガソリンを
流し点火し軍の書類を火の中に大量にほり込んでいた。

反対側の広場には機関銃、小銃、擲弾筒、軍刀、拳銃、銃剣など
が分類もされず野積みされていて「出来るだけ上の方へほうり投げ
よ」と週番腕章をつけた軍曹が大声で指示。武装解除とはソ連軍の
前で両手を上げ、ソ連兵に直接武器を取られる屈辱儀式と思ってい
たが、100%日本軍任せのこのやりかたにロシア人特有の大雑把
があるのだろうか、それとも大陸的鷹揚さのか解からぬまま、埃一
つ付着していたら顔が変形するほど殴られる「菊のご紋章」の打ち
込まれている小銃、しかも一時間前に磨き上げた小銃を投げ捨てる
時は一瞬心が疼いた。

丸腰にされ雑糞に飯盒と箸を入れ、水筒を下げ風呂敷包みの手荷
物の姿にされ、改めて戦意を失い憔悴と疲労の色濃い捕虜の姿に一
変し重い足取りで孫呉陣地を後にした。雑木林を遮蔽物に見立て延
々と掘られた戦車壕や蛸壺には日本兵の姿もなく、陣地を抜け広い
未舗装の道路に出た。ここで初めて数人のソ連兵に出会う。彼らは
まだ十七、八歳の少年のようで紅潮させた頬に銀色の産毛を光らせ
、目の色は子ども頃遊んだビー玉と同じなのに驚いた。カラシコフ
連発銃を横に構えカン高い声で私達は制止され、目の前をソ連兵を
満載した大型トラックが土煙を上げ次々北上し、彼らは私達を見て
銃を上げ「ワァー」と歓声を上げ私達は下を向き沈黙だ。続いて砲
身が3メートル以上もあるカノン砲、大口口径の榴弾砲、迫撃砲自
走車が次々続きその後、轟々と地響きをたてT三四中型戦車、これ
は装甲板70ミリ・85ミリ砲搭載、重量25トンというヤツだ。
この圧倒的な機甲部隊がソ連方向へ北上して行った。私達はソ連に
早や凱旋する部隊かと思った。

後日知ったのだが、我々第四軍を無血降伏させたこの機甲部隊は
北上しソ連に凱旋したのでなく、私の原隊、私が六月までいた第六
国境守備隊が敗戦後も降伏せず抵抗しているので攻撃に向かったと
いうのだ。九日から三時間どころか敗戦後の十六日も抵抗している
戦術と「死んでも降伏するな」の至上命令を守っている「六国魂」
の凄さに驚くと共に、同じ班のひ弱な橋詰を一瞬思った。

ここまでは日本軍独自の行動であったが、ここからソ連軍将校と
ソ連兵の監視下で歩かされた。目の前に広がる曠野、人手の入って

いない湿地帯や荒野の雑草は立ち枯れたように秋の兆しを見せていた。なだらかな起伏の丘を越え孫呉の街へ入った。孫呉はもとと何もない曠野であったのを「ソ連侵攻」に備え昭和十一年日本が2・26事件に関与した第一師団將兵をして、その年の三月にこの地孫呉に陣地を構築させ、日本軍將校や軍属などの家族も住まわせ、日本が造った街で今の公営住宅のようなセメント住宅群が何百棟も並び、住宅や兵舎に使用され、先住人の満人達の住宅は木の枝を交差させた屋根に土を乗せ、土で固めた壁の土造りの平屋ばかりだった。そしてこの住宅全棟はソ連軍に没収され、住宅の住人日本人は満人の小屋かテントへ追いやられていた。

検問が始まった、一人づつソ連將校の前に立ち両手を挙げ、胸や両脇を叩かれポケットに手を入れられ、小刀や紙幣、小銭は没収されたが、万年筆や時計、針、糸などは許され、二十人一組にされ住宅の六畳二間と台所の部屋へ入れられ、私達は何年ぶりかで靴を脱ぎ畳の上に座り込み、畳に頬づりして望郷の涙を流した。九日の開戦から土の上での睡眠であった私達は、冷氣や湿気が直接背中や尻に伝わらぬ畳の良さに睡魔に襲われみな昏昏と深い眠りにおちた。「起床」の声に一瞬内務班であるような錯覚にとらわれた。点呼がありソ連軍將校に日本の下士官も同行し、食料受領に割り当てられた当番が平らべたい中国風鍋と粗引きの玉蜀黍（トウモロコシ）それにひと欠片の岩塩を持ってきた。誰かが「こんな物どうして食べろと言うのだ、しかも二十人だぞ。これがスターリン給食か」と嘲り笑った。が、これが直ぐに百八十万日本人に襲いかかり1/3の餓死。おぞましい人肉事件に発展する食料事情の最初とは誰もが想像出来なかった始まりだった。

開拓団から召集されたFは軍隊に入って初めて米の飯が食べられ「軍隊はお天道様と米の飯は付いて回る」は本当だと話していたが、このFが調理を引き受け「トロトロ炊いてお粥にするんや皆燃やすもの拾ってこい」電灯も水道もなく私達はFの言うままに働き、八月十六日はこのようにして終わった。

十七日夜明けとともに、そくそと軍人軍属の他、多彩な職種の日本人役人、警察官、学校教師、商人などの男子や開拓団の少年達も大勢が入ってきた。ソ連兵に（男狩り）され取り残された婦女子はソ連兵や満州人の格好の餌食となり、襲撃されていると聞いた。兵隊の中には不精髭のままで血の滲んだ繃帯をまき、戦友に支えられている者も大勢いて、第六国境守備隊方面から今も遠雷のように響

いてくる爆発音に私の心は痛んでいる。轟く砲声の下で死闘を繰返していた兵隊達ではないかとも思ったり、三時間の玉砕部隊だ全員戦死でこの収容所に辿り着ける訳がないとも思ったり、私の原隊第六国境守備隊は「陣地死守」の命令を忠実に、しかも死を賭して戦っているのに「ご聖断」に従った私はと複雑な混乱した思いであつた。昼間は労働もなく「飯」のために燃料を探したりしながら、疲労と睡眠不足は日に日に回復して下痢などに悩まされていた者も快方にむかっていた日が一週間ほど続いた。

朝の点呼で原隊復帰の知らせが入った。私達は前述したように六月満州各地部隊から山神府下士官候補者教育隊に派遣された寄合兵で各自がそれぞれ出身部隊を持ち、私は出身第六国境守備隊十中隊朝水が原隊なのだが、私が入隊した昭和十六年から日ソ戦では最低三時間の守備攻防戦を想定なので、私は原隊は既に全滅と諦めていた。

※原隊「朝水」派遣先「山神府」現在「孫呉」の位置関係地図※



孫呉	〜	黒河	95キロ
孫呉	〜	愛琿	45キロ
孫呉	〜	二站	55キロ
孫呉	〜	山神府	250キロ

昭和20年6月 朝水→山神府へ
 8月9日朝 山神府で日ソ戦知る
 9日孫呉へ行軍 13日夕孫呉着
 14日孫呉ミグ戦闘機の空襲受く
 15日 地上戦もせずに降伏する
 愛琿・朝水21日迄敵戦車と死闘

午後、夏梅お前の原隊六国（第六国境守備隊）が別棟にいるぞと教えられ半信半疑で行くと、三回も召集されていたK軍曹が顔を見るなり「夏梅生きとったんか良かったのう」と抱きついて喜んでくれ、私は不動の姿勢で原隊復帰申告をしようとしたら手で遮り「おい夏梅が帰ってきたぞ！」と大声で皆に知らせてくれた。A班長や古年兵も車座になり日ソ戦になれば三時間は死守せよ。の絶対命令の朝水守備隊が敗戦も知らず二十一日まで抵抗した死闘を話し始めた。

K軍曹は、お前が六月下士候教育に行った頃から江岸（満州国黒竜江岸辺）と黒竜江をはさんだソ連側との間に緊張が発生した。江岸からソ連側へ発光信号弾が活発になり、一晩に江岸とソ連領から

21 発も揚がったが一人も逮捕することが出来ない周到な奴らで、二站到野戦陣地を構築し戦車壕掘りをしていた中隊の主力はソ連侵攻で強行軍で帰隊すると通信してきた。戦争と知った大勢の非戦闘員（民間人）が雪崩れ込んできて、自分で安全思う場所を探しそこから離れるなど怒鳴り落着かせ、頼みの戦車攻撃砲も沖繩か本土へ送り武器は「人間爆弾の破甲爆弾」だけだが一応残務要員で迎撃体勢を完了した。中隊長は歩兵の我々に驚く命令を厳命した。命令は抵抗作戦に有効だった。その命令は撃てば居場所を教える小銃の使用は狙撃兵以外は厳禁し30メートル内の手榴弾戦を命じた。一木一草を知り尽くしている地形は我々に有利だったし、蛸壺に隠れソ連兵をやり過ぎ背後から無言の手榴弾攻撃、包囲戦に出て円内に敵を追い込み撃滅もした。一番大きい防御力は戦車壕で戦車の進入を陣地外で阻止したことだ。二日後二站から主力が疲れ果て帰隊した。朝水守備隊への命令は「ソ連軍は主力を以て愛環陣地を攻撃中、貴隊は迂回し孫呉、嫩江を狙うソ連先遣戦車集団を二站にて阻止せよ」だ。

F 伍長の話。

俺は戦車攻撃の人間爆弾に「敵と一緒に死ねるか」と疑問を感じており俺流の考えがあったので、よし！実戦で試そうと二站で陣地構築していたM兵長他三名と二站へ向かった。出発に際しK軍曹は「どないしても帰ってこい」と送り出してくれた言葉を俺なりに考え「人間爆弾」はやるなど受けとめ俺の試案を説明し目的地に着き直ぐ行動に出た。先ず巻脚絆を解き先端の紐で破甲爆雷を縛り道路の脇へ遮蔽して置く、巻脚絆を伸ばし隠れて俺が持つ、敵戦車接近目標地点で爆雷導火線に点火、同時に俺が巻脚絆の紐を引き戦車の下で爆発させる。点火・監視・狙撃の分担作業を正確にし、集合地点を決め決行は夕刻か未明と分散しチャンスを待った。

十四日、前夜から俺等は登り坂の灌木とボサの中で待ち伏せた。未明の霧の中を敵戦車が五両接近、目標は先頭指揮戦車だ。俺は心臓の音が聞こえるようだった。轟音を響かせ目前に迫った敵戦車を前に「ヨシ」と紐を引っ張った。もの凄い爆発音のあと何も解からず、気が付くと俺は灌木の中に爆風で飛ばされていた。目の前に真赤な炎に包まれた指揮戦車と鼻を衝く火薬と燃料の臭いで我にかえった。集合地点にはSだけが遂に戻ってこなかった。

体を固くしてF伍長から聞かされた話に私は一言もモノが言えなかった。それにしてもM兵長がここに居ないのとは思いつながら話を

聞いていた。

この戦術はM兵長から詳細な報告で採用され成功。自爆せず敵戦車を擱座炎上させ味方兵士の命も救う作戦と高く評価された。M兵長は十七日二回目の出撃を自ら志願して敵戦車の下で爆発させ成功したが、別の戦車の砲塔からの機銃掃射で三人戦死、初年兵のFだけが戻ってきた。

八月十七日M兵長戦死。この日私は收容所の中で生命の安全を保証されていた。みなさんもう一度「朝水・二站・孫呉」の位置関係図を見て戦争の非情さを考えて頂きたい。

九月に入ると北満の夜は氷点下になり冷気は部屋の隙間から進入、暖房もなく私達は手持ちの布やテントの布地などでシャツやチョッキなどを作った。一日二食の高梁や玉蜀黍（とうもろこし）のお粥に、日本軍の乾燥野菜が申し訳け程度に入っている。空腹が我慢できない者達は「ノビル」「アカザ」など食べれる野草はなんでもお粥の足しにしても飢餓感を満たすどころではなかった。その頃、若いソ連兵の監視兵から中年過ぎの兵士と交代した。連中は馴れ馴れしく部屋に入り込み時計や万年筆とソ連の粗悪煙草「マホルカ」との強要交換を要求した。連中は全員手首に数字の刺青（いれずみ）が彫られていて恐怖心が先立ち連中の言うがままで、日本軍が占領地でやった事の仕返しと思った。それから暫くたつと奴らは来なくなつた。「来るとうっ」としいが、急に来なくなると気になる」とか「あいつ等シベリアの監獄にいた囚人を兵隊にしたので、今俺等から取り上げた時計なんかでゲーペーウー（ソ連国家秘密警察）に調べられている」と、もっともらしい情報を提供する者が現れ「どこから聞いた話だ」と問い質すと「今に判る」と曖昧に答えるなど、情報通のほか怪しげなロシア語で通訳の助手を買って出る者、捕虜の中からかすかな分化の兆しが現れ始めた。

ここ孫呉に集められた日本人は約二万六千人と言われていた。大多数が兵隊と下士官、それに少数の下級将校。他は国策に沿って「王道楽土」で一旗の野心家や冷害に怯える日本の農地を見限り第二の故郷村を開拓しようとか一村での移民農業者や満蒙開拓団員と十五、六歳の開拓義勇隊員が混じっていた。九月中旬になると毎日二千人とゲートに集められ千人位の単位で梯団を組み出て行った。それから間もない朝「荷物を持ってゲート前に集合」と命令され大勢が続々集まってきた。するとソ連兵が千人位づつ選り出し他の集団へ引率し、見知らぬ者達での千人集団を編成した。私も原隊の人

達と別れ、初めて顔を合わせた人の中には五十過ぎたオッサンや開拓団員や小柄で痩せこけた少年もいた。日本人の炊事係から「二食分だぞ」と念押しされソ連兵が食べている同じ黒パン二切れを受取り、四列縦隊を組んで東北に向かって歩き出した。

歩くと揺れて黒パンから発散する甘酸っぱい匂いの誘惑に勝てず、チョップリむしり取ては食べた。お粥のような高粱粥で空腹だったので至福の味わいで昼食欠食でもいいやと食べ食べ歩いた。一日目の夜は設営されていたテントで野宿、地面から伝わる冷気で眠れずそれが二日目の行軍にて、足並みは重く隊列は乱れ長くなるソ連兵はドワイ！ドワイ・ビストリー（早く早く）とせきたてる進む方向は二站だ。この道は日ソ戦と同時に山神府から夜を徹し孫呉へ向かった道で見覚えもあり、山神府を経由して黒河へ行くのだろう。脇を並行して歩くソ連兵に行き先を聞くも知らない相手にならない。それでも中には「黒河、ブラゴヴェシチェンスク、ウラジオトウキョウダモイ」と喜ばす者もいた。

小興安嶺山脈の枝脈の登り坂にかかると今迄に体験もしなかった異様な例えようのない悪臭がしてきた。皆、鼻や口を手で被いながらやっとの思いで台地に辿り着いき、ホッとする間もなく凄惨な光景に後退りする有り様だ。私達が立っている周囲には十両以上の戦車、多数の軍用車両が炎上放置され、ソ連兵も含め大勢の日本兵の死骸が散乱しているのだ。火炎放射器で焼かれたどす黒い死体。腐敗し白骨した髑髏顔。敵味方も軍服は腐らず体だけが腐り異国の土に化している者もある。周囲を無数の蠅や虻が羽音をたてて群がっていた。小銃、機関銃や弾丸も、乱射した葉莢も散乱しており腐敗ガスで腹をパンパンに膨らませた軍馬が硬直し後足を空に突き出している。この中に日本から一緒に入隊したM兵長が十七日戦死し、十五日に日本が負けたのも知らず二十一日迄ソ連軍を執拗に攻撃し死闘を繰り返していた戦友達の激戦地なのだ。探し出し野の花の輪でも捧げ合掌したいがどうすることもできない情けなさに涙した。※この放置戦死者は敗戦の翌年昭和二十一年（1946）五、六月に、八路軍の管理下で上村軍曹（豊橋市）が埋葬したと証言あり、戦勝国ソ連兵も放置されたままで仲良くしてくれと同じ穴に埋葬したと証言した（※橋詰記）

三日と半日歩き続け黒河の街外れの江岸船着場に到着した。黒竜江を目の前にするのは大五家子（タウジャウズ）の江岸監視哨勤務以来だから二年振りだ。監視哨の望楼から百倍の眼鏡で目の下の黒

竜江を上下航行するソ連の船舶名・通過時間とソ連領の兵士の移動など逐一報告した。時にはソ連領と呼応する信号弾の打上げ現場を押さえようと走り回ったことを思い出した。対岸のブラゴヴェンチエックスとは約三キロの河幅で点々と灯が点き初め、大河は黒々と流れていた。私達は繋がれていた木造の舢に分乗し蒸気船に曳航され、何の合図もなく岸を離れた。同乗していた十数人のソ連兵は自国に帰れるので賑やかに喋り、一人がバラバイカを弾き始めると一齐に唱和しだした。ソ連兵の笑顔の合唱を聴きながら私達を待っているものはと頭からはなれなかった。

対岸の街、ソ連領ブラゴヴェンチエックスへ上陸させられる。

ドスンと軽い衝撃をして舢は止まり、暗闇の棧橋を渡り道路へ出て更に鉄道線路を横切り白樺林の中へ入り野宿。朝起きると広い白樺林一杯に日本人捕虜がうごめいている表現そのままに居るのだ。先着者の情報では「鉄道線路を横切ってきただろう、あの先に引込線があり一日か二日おきに列車が来て、ここにいるぐらいの人員は家畜貨車に詰め込まれ一ぺんに何処かへ連れて行かれ、森林伐採でもやらせるためにな」と。私達はトーキョウ・ダモイの幻想など泡のように消え失せ、凍土の中の重労働を強制させられると観念せざるを得ないと思った。朝食後点呼があり四十人ほどの私達のグループに五十歳前後の開拓農民と十六、七歳の開拓義勇隊員が四、五人入りその数の誰かが出ていった。「整列」の命令が出たが、統制のない烏合の衆のようにダラダラした集まり方にソ連下士官が激怒したが、私達は服に付けていた軍隊の階級章を引き千切って捨て「上官の命令は朕の命令と思えの天皇中心の掟」を拒否した集団に変貌しており、軍隊経験もない人も大勢で新しい集団をまとめる秩序づくりの始まりでもあった。

四、五百人位の少人数が四列縦隊でブラゴエの街を歩き回されているようであった。家並みはみな太い丸太を組合せ、どの家も小さな窓際に花を飾ってレースのカーテンが垂れていた。商店は全然見かけず、道の所々で配給の穀物などを受取る女性が袋を広げ立っていた。女性達の私達を見る目は笑みを浮かべ以外に温かいものを感じた。帰り道あの引込線の近くまで来たとき列車の振動音が聞こえてきた。家畜貨車の上にある小窓から顔だけ出した捕虜達は私達に懸命に手を振り「サヨナラ」を叫び、私達も懸命に手を振った。白樺林の野営地に戻ると斜陽の中には百人位しか残っていない、私は背筋に寒さを感じた。

次の日の朝食後私物を持って集まれと言われ、荷物を持ったまま昨日と同じようにブラゴエの町外れの轍のデコボコ道を寒さに震えながら歩かされ貨車で送られる連中とはちょっと違うのが妙に気になった。この辺の家並みは昨日と違い、有り合わせの板を張り付けたような板塀が続いていて、貧富の差のない平等の社会主義国家で、労働者農民を搾取する資本家も地主もない働く人の天国国家が三十年ほど前建国されたばかりなのに、もう貧しい人達の居住群地がある。と判った。貧民街を過ぎると煉瓦造りの大きな建物があり塀は壊れ窓枠は板で塞がれ廃虚同然みすぼらしくった。敷地の入口に新しい哨舎が建てられ建物全体を有刺鉄線が張られ囲んでいた。昔のお屋敷の大扉は塗装は剥げ落ち見る陰もないが良い木材を使い細かい彫刻で仕上げられており、ヒョットしたら帝政ロシア末期の高官屋敷跡かなと思いを巡らし、この建物を破壊したのは革命の赤軍兵士か、それともシベリア出兵した日本軍かとも思ったりした。皆に選ばれた班長は「ここが我々の収容所だ」と告げ私物を部屋の中に置き屋外に集まるよう命じた。私は河一つ隔てた朝水陣地に五年いたので真冬の気温も大差ないことを知っていたので、奥シベリアへ連行されなかった。ので命拾いした気持ちになった。しかしその思いは豹変するのである。いつ終わるか判らぬ苦役の日々、日増しに募る飢餓感と栄養失調、虱の大発生による発疹チフスの大量死、骨と皮だけになり望郷の願いも木像のような姿になりノルマを呪い大勢が死ぬ。私が命拾いした気持ちになったのは「衣食住」に満たされてのことを忘れていた。

ここから毎日、アムール河（黒竜江）ブラゴエ波止場で満州全土から略奪したあらゆる物資を満載した貨物船から、ネッカチーフを被り銃を持った太っちょの女兵オバサンに監視され荷下ろし作業をさせられた。貨物船の前で通訳を通してソ連軍将校が「この船の積荷を今日中に下ろせ」と命じ、船と岸壁の空間に巾八十センチ位の長い板の上を荷物を担ぎ渡る危険作業であった。重さ六十キロの穀類麻袋を二人がかりで背中に乗せられると一瞬息が詰まり重量が足にのしかかる。袋の両耳を掴んでゆっくり立上り頼りない腰付きで一步踏み出す、渡しの板がしない揺れる全神経を集中し揺れに合わせないと転落死なのだ。昨日まで野宿だったのが廃屋でも屋根の下に寝るだけで有り難かった。今日が何日で今が何時かなどは知る必要もない日が続き、着のみ着のままの夏服と夏の下着と手製のチヨッキに手製の手袋だ。九月になると夜は長く暗いのにソ連兵が叩くレールの切れ端を釣り下げた合図音で起こされ捕虜の長い一日が始まる。起きると顔も洗わず（洗う処もなかった）飯盒に分配され

た高粱粥をむさぼるように腹に流し込む。食後一服などなく屋外で点呼だ、四列に並んだ私達の間にはソ連兵は割って入り一人づつ数える。私達は寒さでイライラして抗議の足踏みだ。覚えたロシア語で34と教えるも知らんぷりして一人づつ数え34人と確認すると「ウオー」と唸るだけだ。99の出来るソ連兵は一人もいなかった。

荷揚げ作業は沖仲仕で超重労働なのに、私達は孫呉の收容所以来高粱粥二食なのだ。仕事は弱り切った体力にきつくのしかかり監視の目の届かない積み上げた穀物袋の陰に隠れ氣息奄々の状態だった。捕虜が呪い苦しめられたノルマは積荷を全部降ろすまで時間に制限はなく延々と続けられ、監視の女兵オバサンも付き合わされるので手や体を大げさに動かし通じないロシア語で怒鳴るのだ。荷揚げ作業が始まるといつも小学生位の子どもが十人程は来て一日中屯している。子どもらは荷を担ぐ私達にピューと鋭い口笛でここへ袋を落とせと指で合図をする。担ぎ方を直す格好をして落とすと袋が破れ大豆が散乱する。子ども達は夢中で掻き集め持ってきた袋満杯にし担いで一目散に我が家へと散らばっていく、中にはこの寒さなのに裸足の子も何人かいた。港からの帰り道はストープの燃料を集めながらの帰路である。錆びたベンチが並びベンチの木造部、煉瓦造りの花壇が壊れ花壇を取り巻く木造柵、緑色に塗られた長い板塀をべりべり引き剥がし、收容所に帰ると今日扱った穀物をポケットや風呂敷で作った袋から出し合い、水で洗い飯盒でストープの上に並べ炊き上がるのを待つ楽しみもあった。

ストープの上で飯盒の大豆が煮えている。ストープの煙突は四方八方から針金で支えられている。この針金はこの建物に張り巡られていた電線の被覆線を引き抜いた裸銅線で、被覆線を代用ローソクにして燃やし照明なのだ。「照明は俺に任せよ」この方法を編み出した人は尊敬された。私達は天井裏や屋根裏の電線まで探した。そう電気遮断の建物なのだ。手足が温ると上着とシャツを脱いで虱退治が日課なのだ。孫呉に收容されて以来、下着の洗濯どころか顔を洗う水もままならないのだ。衣服の縫目に沿って虱の卵がびっしりと並んで生み付けてある。血を吸ってぼんぼんに膨らんだ親虱と縫目に並んでいる卵虱を指先で押しつぶし殺していくと爪の回りがどす黒く、血に混じっている人間の油でネバネバになる。痩せ細った人間の体から脂気がなくなり皮膚は乾燥して粉を吹いている。正に地獄絵そのものであった。

飯盒の大豆が香ばしい匂いを出し始め、荷役作業で盗んだ岩塩を

一つまみ入れる。スリコギに似せた棒でつき始めると大豆汁は見る見る牛乳色になる。よくかきまぜ飯盒の蓋に均等に分配する。大豆汁をフーフー吹きながらノドへ流し込む、至福の味だ。消化能力を失った胃袋に優しくしみ込んでいくのが判る嬉しさ。大豆は畑の肉とかで大事な栄養源。食料や塩を盗めない捕虜達もいると思うと有り難いと我慢もした。枕はなく雑囊を枕に、胸の上に上着を乗せ二つ折りの毛布の間に入りサンドイッチになって横たわる。目を閉じれば父母兄弟、友人達との会話が脳裏を駆け巡りたまらない郷愁に誘い込まれる。大豆汁に涙を流す落ちぶれた姿のままでもよい故郷の土を早く踏みみたいと又涙す。孫呉の野戦陣地で班長から戦争は終わった。おそれおおくも天皇陛下は「タエガタキヲタエ、シノビガタキヲシノベ」と仰せられた諸君は陛下の御心を拝し奉るようにと訓辞されたことなども走馬灯のように思い浮かべ、このタエガタイ生地獄がいつまで続くのかと涙するのであった。

青い空が鉛色に変わり粉雪がちらつき始めた。私達にソ連軍用の防寒外套、防寒帽子、防寒手袋、防寒長靴が渡され冬を越させるのだと覚悟した。日本の軍隊でも「服に体に合わせ」「足を靴に合わせ」なければならなかったが、外套は裾が長く地面を引摺り、防寒長靴はフエルト製で左右同じ、フエルトを圧縮したもので手触りは温かくロシア人が履いているのと同じである。ソ連は靴下がなく代わりに布を足首から指先に向け包むように巻き丁寧につっこみ履いていた。この日以来私達は外套の裾を引摺り、防寒帽子の耳垂れを下ろし、頬の肉は落ち真っ黒に汚れた顔、目だけギョロギョロさせた「亡者の行進」に見えたかも知れない。フエルト長靴は足に巻く布がないので靴の中で足が踊り、始めは温かいがジワジワと雪や水の水分が沁み込み靴底が凍り、道路も凍っているので転倒しないように注意深くソロソロ歩く、逃げられないためだと言う者もいた。

黒竜江（アムール河）に流水が現れ出した。二、三日で大小無数の氷塊になりこの大河を覆い尽くし、水面を漂う水も凍らせてしまふと、もう来年春まで流れを見せることはない。船も動かなくなり私達は陸揚げした穀類を橈に乗せ引込線に並んでいる貨車に積み込む仕事になった。一年を通して夏時間なので冬も一時間早く作業開始だ。日の出には間がある波止場で仕事をしていると道巾一杯に大型トラック、鉄道線路を積んだトレーラー数十台が集まり道路を塞いで橈も通れなくなり臨時休業。鉄砲を持って私達を監視しているオバサンと肩を並べて見学することになった。線路を積んだままトレーラーは結氷した氷の上へエンジンを吹かせて進入した「氷の上

に線路を敷いてシベリア鉄道と満州鉄道をつなぐのだ」説明がなくとも誰にも判った。それにしても凍った河に線路を敷く発想は温暖国日本人には及びもつかない常識外の考えで、波止場で働いているロシア人もノルマを忘れ世紀のソ満鉄道開通作業を見守ることになった。完成すれば大連、釜山へ乗換えず行け一層望郷の念がつのるばかりだった。

幌付大型トラック数台から百人以上のソ連兵が飛び降りると、別のトラックから枕木や器材を降ろし、シャベル、スコップ、鶴嘴などで凹凸の水を人海戦術で平らに、ソ連兵は防寒帽の垂れも下ろさず白い息を大量に吐き出しキビキビと働いていた。昼も過ぎ灰色の空に太陽が黄色く傾き出した頃、レールは一直線に対岸満州国へ延び所々で点検作業をしていたが、引込線から機関車が五、六面の貨車を引っ張って近づいてきた。機関士が降りて将校達と一言二言話し機関車に戻ると「ポォー」と汽笛一斉。世界一の軌道巾のシベリア鉄道の機関車が氷上のレールに向かってゴットンと動きた。作業員も見物人も車輪とレールと枕木の接点に目を凝らしたが、厚さ2・5メートル以上の氷はビクともせず貨物列車は徐々にスピードを出し、今度は大きく吠えるようにポォーと叫ぶと、花火も揚がらず、華やかなテープカットやくす玉割りもなく満州国へ公然と略奪の王者貌して進入し、穀類は家畜の餌まで秋の収穫も脱穀させ、屑鉄は折れたスコップの破片もと徹底し、満州では次の収穫まで食料難に追い込まれ、一番被害を受けたのは日本政府からも見離された満州のリーベンクイズ（東洋の鬼子）で餓死者が続出した。

翌日から私達の作業はがらりと変わった。昨日開通？したばかりの氷上線を満州から直接貨車で略奪物資が運ばれてきた。満州側でも準備していたのか満州の機関車が満州の貨車に満州の物資を腹一杯満載して三十両四十両とロシア人機関士の運転でシベリアの奥地へ運ばれ、この地域で必要な物資を積んだ貨車は切り離され私達が降ろすのだ、貨車も三十屯積みや五十屯積みと巨大なのだ。降ろす荷物は食料だけでなく旋盤とか圧延という工作機械、輪転機などの印刷機、レントゲンや歯科の機械など使用中の言わば中古を分解木枠で梱包。必要な物資を選んで略奪したのでなく、手当たり次第略奪してから考えるところか思えないのだ。荷物は重く冷たく穀物より味気なくなによりも私達の栄養補給源は完全に絶たれてしまった。

実に不思議なのは満州から来る貨物列車だ。満州へ発車したのは開通式？の記念一号便だか、実に到着便が多いのだ。極めつけは、

春近く氷上線最終便は満州の北安（ペイアン）から線路と枕木を日本人捕虜に解体積込みませつつ黒河までの線路304キロメートルと枕木を運び込み、レールは第二シベリア鉄道建設へ回し、枕木は暖房用にした。バム鉄道（第二シベリア鉄道）建設に従事した捕虜は枕木一本捕虜一人の命であったと証言している。余談になるが北安と黒河間の鉄道が再開されたのは新幹線開通、昭和三十九年（1964）後である。

一番こたえたのは石炭降ろした。満州国の無蓋石炭運搬専用車は積載三十屯から五十屯で実によく出来ていて車体の外側に取り付いてあるレバー操作で石炭車の底が開き石炭が落下する仕組みなので。石炭車を石炭貯蔵場所の高い線路へ誘導し下へ落とす仕組みだがそれが無いから、レールの周囲にあふれた石炭を遠くへ運ぶ繰り返して忍耐と根気でイライラするのだ。酷寒で雪と露に濡れた石炭は貨車の形に凍って落下しないのだ。それを先の尖った鉄棒で突き落とすのが容易でない。フェルト靴がコチコチに固まり歩行困難、防寒帽の垂れをおろし鼻当てをしているので息がまつ毛や眉毛の上で凍り、呼吸の度に鼻毛が鼻腔にペタペタくっつく。この現象は氷点下三十度以下と全員承知しているのだ。湿った防寒靴は足の指先の感覚がなくなるほど冷たくなり、凍傷なら切断されるので必死に足踏みと指先動かしを繰り返し、ようやく足も体も少しは温かくなりホッと一息し、また鉄棒で突つつき始めるのだ。

その日の朝、点呼前に重い扉を押して表に出た。警備兵は銃を持ち私達を監視する任務だが最近ズボラなソ連兵が増えてきて、今朝も入口に銃を立て掛け石段に腰を下ろし、大きな顔写真の掲載された新聞を読んでいて、近くにいた開拓団少年に写真の人物名を知っているかと聞き少年は「知らない」と、満州でソ連兵に男狩りで拉致された民間人が「レーニン」と一言。警備兵は自分の問いに答えた者がいて嬉しかったのか親指を立て「ハラショー」。今日の作業は船から荷揚げした穀物を引込線の貨車に積むのだ。そろそろ炊事係がリヤカーで高粱粥を届けに来る時間かと思う頃、班長が皆を集め「明日十一月八日はソ同盟の二十何回めかの革命記念日で祝日となり。今からこの付近は前夜祭で人で溢れるから、作業を止め収容所へ帰ることになった」と嬉しい朗報を伝えてくれた。「だから今朝の新聞にレーニンが」と納得した。

前述した貧民街を抜け収容所に着くと炊事係が炊事場へ行ってみると言う。行くと二十人以上のおばさん達が調理台に乗せられた白

い脂肉の間に、少し赤肉が交じっている大きな豚肉の固まりを囲んで、興奮して大声を出し合っているのだ。白い口髭を生やした爺さんが斧のような刃物で豚肉を叩き切り、天井から吊るした天びん秤に乗せ紙切れのような切符と交換し持ってきた平鍋や洗面器に入れ皆ニコニコなのだ。中にはぬるぬると台から滑り落ちそうな内蔵を指先でちぎりポケットにねじ込むお婆さんもいるのだ。明日のレーニン祭の特別配給らしいが大勢集まる家屋がないので、廃屋お屋敷の料理場が利用されているのだ、それにしても日本人捕虜に自国の貧しさの一端を堂々と晒け出している度胸に感服した。

レーニン祭の恩恵は私達にも平等に与えられ夕食に炊事係が玉蜀黍のお粥の大鍋の蓋を取ったとき湯気と共に何時もと違う匂いが漂った。鍋の中に薄っぺらい脂身少しだが浮いているのだ。肉には軍隊以来の再会で食欲をそそられた。夕食後久しぶりのご馳走と明日はレーニン休みで皆申し合わせたように早くから横になった。アコイディオンや太鼓に合わせて爆竹や歌声でおこされた。大勢の足音と大勢の騒ぎ方だ。毎日往復するするこの道の付近にこんな大勢の人が住んでいたとは思わなかった。あくる朝、ストープには大豆や粟を浸した飯盒が幾つも並べてあり、集合、出発もないのでゆっくりと虱退治をしたり服やシャツの破れを繕っていると、二階へ遊びに行っていたKが戻ってくるなり声を殺して「オイ来年三月帰国できるらしいぞ」とびっくりさせるような情報を発表した。

思わずレーニン恩赦かと聞くと真顔で怒り『コックリサン』のお告げだと言うのだ。Kが言うには紙も鉛筆もないので板の間の上にストープの灰を平らに敷き伸ばし、いろは48文字を書き三本の小枝を揃え上部を縛り、下部を大きく広げ、広げた三本の内二本を一人づつ持ち一本は誰も触れないようにし、お願いごとを呪文を唱えお祈りすると、不思議なことに誰も触れていない一本が文字の上をなぞるように動きたし、一時停止した場所の文字を繋ぎ合わせたら『らいねんさんがつきこく』とお告げが出たと言うのだ。『コックリサン』を信じる者も信じない者もこの冬を越す自信がなく、私達は『コックリサン』にも日本の陰膳にも見離されてしまったのだ。

飢餓食の改良はレーニン前夜祭の夕食一食のみで相変わらず高粱粥を胃袋へ流し、裾を引摺った外套を着て防寒帽を被り紐で繋がっている防寒手袋を肩からぶら下げ、底が乾かないフェルト長靴を履いて波止場へダラダラ歩く、ブラゴエの人達はこの隊列が日増しに人数が減って、足取りも弱々しくなっていくのに気付いているだろう

か。早朝の寒い屋外点呼にソ連軍の軍医が現れ兵士達に何か命じた。兵士達は私達とは離れている棟に入り暫くすると頭からスッポリと毛布を被り目鼻だけを出した幽霊みたいな連中を三・四十人連れ出してきた。みな目をしょぼつかせ、足はフラフラ中には熱のせいかガタガタ震えている者もいる。軍医は何人かの人の目や口の中を診て部下の衛生兵に何か指示していた。

高熱で唸っている病人も一人残らず氷点下三十度の屋外へ引き摺り出されて以来「アレから何人か死んだぞ」と次々噂が流れてくる。そんなとき私は数人の仲間と「棟」へ行くことになり中に入ると屋根も窓枠も床もない煉瓦造りの完全な廃屋で地面の土間に十人位の遺体が積み重ねられ遺体に衣服はなく生まれたままの姿であった。遺体はそれぞれが思いの姿で硬直し掌を広げ腕を突き出している者、曲がった膝は枯れ枝より細く絡み合い、目が落ち込んで骸骨のような口を大きく開け歯並びで若者らしい。私達は言葉が出ず呆然と立ち尽くし手を合わせることも出来ぬほどの恐怖に曝され、流す涙も出なかった。私はこのブラゴエと決まったとき、死の恐怖を感じていたシベリア奥地森林伐採から逃れたのを僥倖と思ったが、この姿の前に立ち「こんな処で死んでたまるか」そう思ったが、自分との間にどれほどの隔たりがあるかと思ひ身震いした。

「立って三尺寝て五尺」と言うが、私達捕虜がくつろげる場合は板の間に敷いた肩幅だけの空間だけだ。しかもこの空間は湿っぽく埃と人垢を吸い込み。蚤、南京虫、ダニ、虱の巣窟で爪先で一匹づつ押し潰す位では駄目なのだ。全身が赤い発疹で埋まり高熱にうなされる者が増え、恐ろしい発疹チフス、回歸熱患者が発生し血便垂れ流しの悲惨な状態へ追い込まれていた。私達はこの建物に入れられた時、全裸で軍医に尻を向け尻の肉具合で①から④に分られ屠所に売られる家畜扱いをされた。①は働く②③は軽作業の炊事、営繕雑用④はオーカーと言って入院。①が休めるのは体温三十八度以上。便所は周囲をアンペラで囲い春夏秋冬露天である。地面を幅八十センチ程長さ深さ二メートルぐらの穴を八コ程掘り八十センチ幅のところへ分厚い板を二枚並べたのに足を置きトイレするのである。掘っているときは土葬の穴かと思っていたが今この寒さでは土は凍り何日もかかるだろう。この異常に深く大きなトイレも今は上へ上へと凍り積み重なりうづ高い糞尿の山で凍ると無臭なのだ。高粱粥は消化せず水分大量の下痢なので、乳白色に血便の血も混り実の色ガラスと思わせる芸術模様の凍り便なのだ。高くなりお尻を突くようになると②③がバールで崩しリヤカーに積み捨てに行く。

私達の班でも最年長のIが発熱。彼は満蒙開拓少年義勇軍の少年から「先生・先生」と慕われていた教官だった。頑健そうな体格をしていたが、それだけに高熱を出すと手足をばたつかせ回りを困らせた。一週間ほどで熱は治まりおとなしくなり故郷の稲刈りを率先してしているうわ言を喋るようになり、気が付くと居ない、皆で探したら外に放置してあるポンコツトラックの運転座席に座ったまま凍死していた。それ以来何人も死者を告別も葬儀もさせずに送ったが総じて言えることは、頑健そうな人はバタバタとよく動き回り脳症を越し絶命。丈夫でなさそうな人はグッタリと死んだように動かず、こんな状態で波止場作業が出来る者は半数以下になりソ連側もようやく労役中止に出た。が、本音は血便垂れ流しの伝染病患者作業員に街中を歩かせないためだと言う者もいた。

実に捕虜の死ぬ順番は体力の無い者と既婚者からだ。②③の中には入院や病欠が相当なのに医者の方ノルマは働く①を増やすので②③が①にされ死ぬのである。波止場作業がなくなり一息ついたが、入院クラス②③の炊事や雑用係は医者の方ノルマの犠牲にされて死んでいくので、雑務当番が直ぐ回ってくるようになり、一番嫌な使役が二つあった。その一つが前述したが凍った人糞山崩しで、作業を終え帰ると衣服や体に飛び散った破片の糞尿が解け匂い出すのだ。「臭いぞ！しっかり払ってこい」と外へ出されるのだ。これほど皆のために必要な仕事をやりながら、これほど嫌われることの馬鹿らしさにつくづく悲しくなる。父母兄弟には見せたくない姿に晒され人間性も剥奪されているのだ。

もう一つの使役、これも順番がくると朝から気分が滅入る「棟」の遺体は全員裸で井桁に5層6層と積まれているのを、ソ連兵が持ってきた馬車の荷台に積むのだ。三十体四十体とうず高く積みロープをしっかり掛け、市民に悟られないよう真夜中引込線の奥にある白樺林へ向かうのだ。私達はブラゴエに着くと白樺林に野宿して大きな深い穴を掘られ、各集団は穴の使用目的も知らず移動して行き、私達もそうだったのだ。その大きな穴の前に着きロープを解くと凍っている遺体はゴトゴト鈍い音を立て枯れ草の上に転がり落ちる。落ちたのを「一、二、三」で穴へほり投げる。死亡者名簿作成もせず何処の誰かも一切不明で、死亡者名簿が無いことは死亡者ゼロであることを知って頂きたい。遺体運びは早く終わらせたい一心で「仲間を人をも」モノ扱いにしたと気付くこともあった。

数日後、夜中私はひどい悪寒に襲われた。毛布、外套、上着を頭

から被り、膝を折って跪くように俯きガタガタ全身を震わせていた。明け方になると身体中がカッカと熱くなりだし、頭痛が激しくなってきたぞと思った。記憶はここまでである。それから何時間か、何日経ったのか暗い床板の上でゆらゆら揺れていた。玄界灘の荒波に大揺れして大連へ向かう輸送船の船倉にいたのだ。身も心も朦朧の状態からようやく脱し、仲間に背中を支えられ粟粥をすれるまでに回復した。倒れてから最初のトイレに行けるようになり、今迄は絞るような腹痛と一緒に乳白色の粘液と黒ずんだ血液が混じった水のような便だったのが、血液は混じっていたが軟便に近いのでホッとした。医者も診てくれず薬もない埃だらけの板の間に毛布を被ってイモ虫のように転がっているのだ。私は医薬がなくとも自力で回復の兆しが見えてきたが、兆しが見えてから大声で騒ぎ暴れて死ぬ者との分岐点にいるのだと思った。死はぼんやりと直ぐ目の前にいるようだが漠としているようにも感じられた。

ようやく熱も下りトイレへ行くのにふらつくこともなくなってきた。捕虜の排便は二通りだ。私のような水分主体の下痢組とまったく排便しない組だ、これは正に悲壮で助けてくれ掻き出してくれと唸り苦しみ叫びもだえているのだ。下痢でも回数が多い方が羨やまられてた。ここで信じられない実体と話そう、捕虜にされてからトイレットペーパー類の使用も入浴も一切絶たれ、人間以外の動物と同じにされ人間の尊厳をも剥奪されているのだ。後輩の橋詰君はシベリアの奥地クラスノヤルスクへ連行され、生野菜と塩を半年以上も絶たれ全員デキモノで苦しめられたと話していた。飯盒の蓋の熱い大豆汁をフウフウ吹きながら少し飲む、その熱い液体が至福の味となつて食道を通過し胃袋へと届く感触は今でも忘れられない。そのおかげか体力も回復してきたので看護の仕事を手伝おうと決心する。仕事は食事の支度や後片づけ、食べられない人の手助け、熱にうなされ昼夜を問わず大声でわめき散らす人をなだめたりすかしたり、体力がなく歩行困難者を支え酷寒のトイレ往復、病み上がりで私もふらふらになるが私もして貰っていたので恩返しと頑張った。

ある朝暗いうちから古い木材を積んだ大型トラックが、十数人のソ連兵を乗せ私達の棟の裏手の煉瓦造りの廃屋前で止まった。こんな処にまで捕虜を連れてくるのかと遠巻きに見ていたら、私達の警備兵に「ドワイ、ドワイ」と追い返えされた。私達伝染病患者を作業のソ連兵に近づけ感染させないためだった。数日して内装改造も終わつたようだ。翌朝班長は全員集合をかけ氏名を読み上げ私も呼ばれた。呼ばれた者は重症者が多く軽症の私達が重症者の毛布や外

套、雑嚢を表へ持ち出しホコリを払うと煙のような埃が舞い上がり目も開けられないほどだった。重症者の荷物をソ連兵が造ってくれた新しい？宿舎へ入れた。窓枠は板が打ち付けられ僅かな隙間から入る光だけで内部は薄暗かった。

新宿舍は厚い板で三段ベットが造られ、横が縦になりこれで隣同士手足が触れたり寝返りで腹を蹴られる心配もなく有り難いと思つた。敷物は今迄と同じ板の上に毛布だけである。私には三段ベットの上が割当てられ荷物を枕元と足下に置き横になったら直ぐにでも眠りそうになる程気持ちよかった、思いがけない高待遇で捕虜達は「へえー」「ほおー」「寝台列車だ！」と感嘆詞を發したほどだ。介護や手助けを必要とする人が低い一段目、二段目にされ誰も苦情は言わなかった。「これで今夜からゆっくり眠れる」と思うとちょっと嬉しさが込み上げたが、どうも伝染病棟らしいので屋外禁足、点呼も「死の水点下三十度以上」「屋外でなく、室内でよいのだ。亡くなった連中や今でも熱病と栄養失調でうなされている連中がいる中で嬉しがってはいられないなかつたし、彼等に「すまん」「申し訳ない」の気持ちはその後、今でも消えることはない。

以前、軍医が仮病者発見目的で、水点下三十度の早朝の野外に熱にうなされていた連中も引き摺り出し点検し調べたが、あの時あの軍医達がこのような新宿舍の必要を建議実現しておれば、今迄これほどの死者は出なかつたに違ひなかつたろうと断言できる。ソ連側が補修してくれた廃屋の中に古材とはいえガッシリした三段ベットの上が、私は久しぶりに前後不覚に眠りこけた。翌朝、屋内点呼で寝台前に並んだみんなの顔も久々に生気が蘇つたように見えた。ここは病人と半病人の病院になったのだ。しかし薬もなければ病状を診る医者もおらず、ただ粟のお粥をすすって寝るだけの毎日なので、私のような半病人は病人の食事の世話や身の回りの手伝いをするだけになり、時には昼間から人に踏まれずに自分の三段ベットの上でひっくり返っている余裕もできた。

医者や薬にも見離された伝染病棟の私達は苦痛な屋外点呼もなく、食事は今迄通りなので微塵も悲壮感はなくみな近く回復を夢見始めた頃、私物を持って全員屋外に出された。私はソ連軍の外套を引摺り半べらの毛布を肩に飯盒と雑嚢を持って、薄暗い部屋から日の当る場所なので私達は久し振りにまぶしい光に目をしょぼつかせ、病人ばかりなので処構わずあちこちとへたり込むのをソ連兵が強引に隊列へ並べ、軍医の前に連れていかれ二組に分けられ、私はまだ

熱病のあとスッキリしないフラフラ組だ。誰かが「今度は何処へ連れて行くのだ」と聞くとソ連兵は「トウキョウダモイだ」と言ったが、誰もマトモに受け取る者はいなかった。百人ほど残された中に私も含まれ他の人は再び病棟へ戻された。

（何処へ連れて行こうと云うのか病人ばかりを、次の処はここ以上キビシイ処に違いない）私はそう思い込み頭を下げうづくまっていた。「立て」ソ連兵の命令でみな足をふらつかせて立ち上がった。収容所のゲートをくぐり引込線のある死体を大勢投げ込んだ白樺林の方へ向かった。（まさか生き埋めと）引込線の踏切を渡ったので（間違いない）と覚悟した。降伏するなと天皇陛下の御命令に忠実な日本兵は降伏した敵を軽蔑し穴を掘らせ、その穴の前に立たせ銃殺してきたのだソ連もかと思った、何人死んで何人埋めても死亡者名簿作成しないから死亡者ゼロ扱いにされるのか、生きてきた証は絶たれ日本政府にも親にも私の生きた証はロシアにはなかったことにされるのだ。貨車が並んでいる横を歩き先頭近くの有蓋貨車の前で止められソ連兵は貨車の扉を開き「乗れ」と合図し、冷え切った貨車の中は米俵ほどの乾草束が幾つもありその上に腰を下ろすと「サヨナラ」と言って扉を締めカギを掛ける音が聞こえた。

生き埋めから逃れたようだが（またもやどうしようもない）ことを思ったりしていると、ゴトンと前からの衝撃が伝わり機関車が連結されたと判った。ゆっくりと動きだしレールの継ぎ目がゴットンゴットンとリズムを刻み出した。上部の小窓から外を見ていた者が「オーイ、この列車波止場へ向かっていゝぞ！」と叫んだ。私達は反射的に薄暗い貨車の中で歩行困難の病人まで歓声を挙げて立ち上がり興奮した。列車は徐々に速度を落とし黒竜江上の新設線路に入り注意深く徐行しながら満州国へ進入した。この先に大連が、釜山がこのレールと繋がっているのだ。みな諦めていた祖国日本に帰れると万感胸に迫る喜びが湧きあがった。「中国編は次回に。夏梅」

※橋詰記

※ソ連は働けない病弱者と国際法に抵触する十八歳未満の年少者を日本へ帰そうとせず。やっかい払いのように黒河へ追放。その一人上村軍曹（豊橋市）は翌年五月二駅の放置死体を埋葬し。朝水開拓団少年岩間典夫（笛吹市）は追放後オロチョン族と生活を共にし、黒竜江省遜克県政治協商副主席（日本では副知事が副議長級）に、追放は昭和二十一年三月黒竜江解氷後も続き、追放された数千人の中、約五百五十名が昭和二十一年六月二十一日監視の中国兵数名を殺し日本へ向け脱走「黒河事件」を発生させた：さて夏梅氏は：

三人の大元帥に翻弄された私の青春

橋詰四郎

◎一人目の大元帥。大元帥陛下の命令で昭和十九年（1944）十一月、人々に判らぬよう深夜私語も禁止され広島駅へ向かった。四列縦隊先頭の私の耳に規則正しい軍靴音がザクザク。両側の家々に電灯が行進に合わすように先へ先へ点り映画のワンシーンを想像させた。電灯の点った家々は日の丸の旗を掲げ、寒いのに街路樹や電柱に身を隠し私達に向かって合掌する姿を見た私は、よしこの広島の人達のためになら喜んで死ぬると決心する。

アイゴ チヨウスイ

関東軍第六国境守備隊は北満黒竜江に沿う愛琿・朝水にあり、歩兵十個中隊、砲兵四個中隊、工兵一個中隊。私は朝水陣地に歩兵として配属され、大元帥陛下即ち天皇からの命令は「兵は戦闘中負傷するも自ら応急の処置を施し八方手段を尽し戦闘を続行すべし、たとえ戦闘に耐えざるに至も後退すべからず。戦闘激烈にして死傷続出し命令徹底せざるか指揮官を失いたるも、兵は携帯する武器を信頼し戦闘すべし」と叩き込まれ、陣地を三時間死守せよが陛下の至上命令だと徹底教育。この三時間で他の日本軍が戦闘準備完了だと。負けが前提なので陛下から軍旗も下賜されない皇軍なのだ。日夜人間爆弾の訓練に励んだ。

八月六日。中隊長に①広島に新型爆弾が投下された、②兵を屋外に出す時は白の長袖を着せ皮膚面を露出させすな、③兵の逃亡脱走に注意。の命令書を手渡すが、中隊長は誰にも話すなこれが命令だと握り潰す「拜んでくれた広島に新型爆弾」考える間もなく九日ソ連軍侵攻。砲弾を沖繩へ送った砲兵隊から、対戦車爆雷を抱いて、空の戦友一機一艦。守備隊は一人一戦車と次々人間爆弾で戦車に体当たりして戦死。三時間どころか八月十五日の敗戦も知らず、強力なソ連戦車軍団を陣地内に侵入させず対等に戦闘を続行。

二十一日、大きな白旗を振りながらソ連軍将校が我々の日本軍陣地へゆつくりと歩いてきた。対等に戦っている私達は勝った勝った。天皇陛下万歳と大騒ぎ、泣いて喜ぶ者もいた。ソ連将校は「ミカドは日本の負けを十五日ラジオで全世界に放送し降伏した」と降伏は敵前逃亡と同じ銃殺だと命じておいて、ご自分が先に降参していたと聞いて驚くも、降伏は陛下への不忠義であり、親兄弟の顔に泥を塗り差別されると思い、降伏を拒否し深夜ソ連軍前線を摺り抜け逃

亡に成功し、ホッとして最初に気付いたことは周囲が全部「敵」と後悔した。戦争で収穫出来ない畑に実る玉蜀黍を食べ、昼は隠れ夜に南下する野良犬以下の有様で今日が幾日かも判らず、会話もなく狂いそうになった頃、ソ連軍と戦わずに降伏した日本軍に遭遇し、これだけ大勢なら殺されはしないだろうと思ひ、ソ連兵を殺してはいないはぐれ兵として拾って貰う。

◎二人目の大元帥。二人目の大元帥は名うての悪で、自分のためなら仲間は何論、肉親でも殺すと云う人物。日本兵をソ連の戦後復興に使うため、シベリアへ連行し背後から銃口で狙わせ強制労働を強要した。シベリアで日本人を待っていたのは、日本人の誰もが体験したことのない、酷寒・飢餓・重労働・虱が媒介する発疹チフスなどの疫病による大量死で、血便を垂れ流し、着替えもなく糞まみれで死んでいった。死ぬと下着も剥ぎ取り丸裸にし、通夜も告別もさせず小屋に積み上げ、トラック一台分になると何処かへ運ぶのである。生きている時は虱と南京虫に、死ぬと狼かエニセイ河に流されたら鰐鰯に食われキャビアだ。「転向組」の「アクチブ」は「白樺の肥やしにされたいか」と。スターリン崇拜を強要し「大元帥陛下は天皇一人で懲り懲り」と拒否する私を二十四時間闘争の餌食にし自殺者も出た。先に死ぬ者を羨ましく思うようになった。

朝の点呼でキツネ（ロシア人女医ニックネーム）が日本兵を助けたいが葉がない、今は血が葉だ。献血すると三日間休まずと言う、血液型を調べる葉もないからO型だけと言う。戦友達は全員栄養失調で献血しても死ぬ奴だから、お前まで死ぬなと引き留めたが、三日休んで四日目に死ぬば、血便を垂れ流さず奇麗な死に方が出来る。日本に帰れた人は、俺の死にざまを母に伝えてくれと頼む。皆明日は我身の沈痛な雰囲気を送り出される。二百CCと書いていたら、ソ連はヨーロッパ圏で倍の四百CC。倍であれば死の計算も倍の確実になると思った。奴も俺も日本へ帰れた。職場の労働者が「広島、長崎アトム全滅」と教えてくれるがアトムが理解できず「拜んでくれた広島にアトム」が気になる。戦争が悲惨ならシベリアは地獄だった。

罪々と九月囚れの雪舞い始む
万物は凍てて二度目の冬も生く



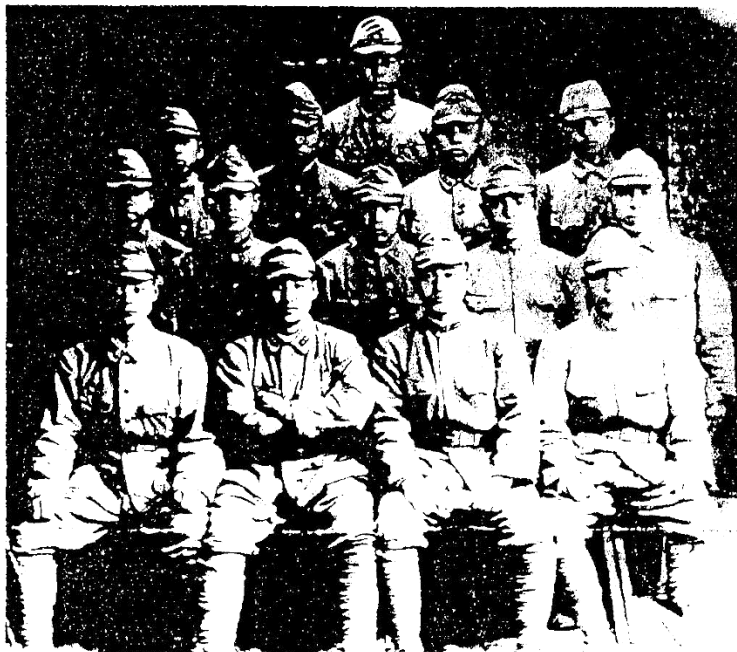
◎3人目の大元帥 地獄で白樺の肥や、キャビアにもならず夢に見た祖国に昭和二十二年（1947）二十二歳で生還。上陸して直ぐ「広島」新型爆弾「アトム」を聞く「たった一発の《核》で広

島、長崎全滅』と。拜んでくれた人達は全滅し私が生き残った不思議さが辛くのしかかり、戦争と《核》を憎み、今も憎んでいる。夢の祖国は三人目の大元帥が仕切る国になって机の上に衣服を脱がせ、スターリン同様生まれのままの姿にさせ、五十メートルほど先の入浴場まで歩かす。アウシュビッツで全裸にされガス室に送られた恐怖心を体験させられる。入浴中に持ち物を全部調べ、極悪人スターリン大元帥もさせなかった屈辱な全裸の行進に抗議すると、マッカーサー元帥の命令だと言う。これが祖国日本が国民に対する上陸第一歩の仕打ちか、捕虜が帰って来ては日本は迷惑で、いけなかったのかと、くやし涙で更に抗議する。

家に落着く間も与えず進駐軍の呼出し、私の特徴を読み上げる「君は橋詰四郎、頭髪は黒、目は茶色、顔に特徴になる黒子（ほくろ）なし、右腕に刀傷あり、間違いはないか」震え上がり戦慄が背筋を走る。四キロメートル以上の行動は申告の厳命を受ける。配達される郵便もハガキは勿論、封書も開封され、文面側一枚一枚に検閲と濃い紫色のスタンプが、お前を監視しているぞとばかり押しつけてあり判読すらできない有様だ。この頃の日本は貧しく、停電は日常茶飯時、街灯もなく暗かった。夜遅く帰宅し家に入ろうとすると背後から、橋詰さんですか？と呼ぶ、振り向こうとすると、そのまま前を見ていなさいと丁寧な口調で言う。何処へ行ってきましたか？と聞く。反抗的な態度をする中国人を日本は痛め尽くしていたので、逆らわずに素直な態度で応対する。世間話を二、三して気がつく

俺はいつ解放され自由な身になれるのか恐怖の毎日。シベリアでも消されたロシア人を見てきたが、まさか日本で俺がと影に怯える生活。昭和二十五年何度目かの呼び出しで出頭する、半袖姿の記憶があるから夏であったと思う。毎回質問にだけ答えていたが、この時は座ると同時に私は叫んでいた「私はカトリックだ」正面に座っていた彼は、素早く立ち上がると私を指差し「ネームデー」と大声で叫ぶ。私も反射的に立ち上がり不動の姿勢で「十二月三日フランススコ・ザベリオ」と大声で即答する。これを境に郵便物の検閲もなくなり、尾行もなくなる。後は四キロメートル以上の行動だけだ、テストとばかり無申告で登山や、魚釣り。私から陰がきれいに消えていた。私は《解放》され《自由》の身になったのだ。三人の大元帥で一番恐怖だったのは、占領下の祖国日本での毎日であった。

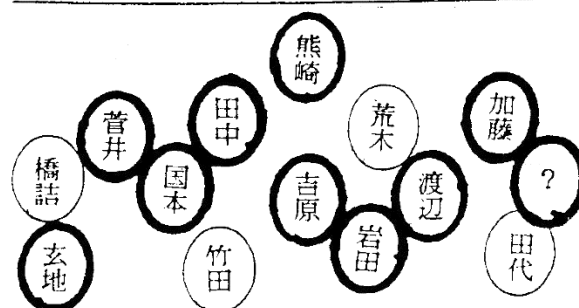
タリスマス耶蘇名を我が家みなもちて



関東軍第六国境守備隊歩兵10中隊擲弾筒班
昭和61年田代氏より頂戴ス死亡者調査田代
昭和20年5月写す 橋詰19歳

六言絶句詩は遺影用写真の裏に記ス生き残った私は騙されていて書いたと断言します。死人に口無しです。再びこのような家族を出させないように国民は監視しましょう。

キヨウアメは、捕虜通信ハガキです中隊長は「生きている」と書けと言いましたが。これで充分と。すると中隊長は私を『珍念』と呼ぶようになりました。る



生還者



死亡者

キヨウアメ
アスハレ

神州生享廿年 五尺軀大君捧
豈怖足米英鬼 悠久大義活悦

引揚げ――一話

佐藤登代子

◎その一 引揚げ船で

やっに乗ることのできた船は、戦時中、油を運ぶ船だったとのこと（母にきいた）で、ひたすら船底におりた記憶がある。途中、小さい、小さい窓に、海中とおぼしき水を見て幼な心に、シンパイした。着いた場所は、人、人、人、どこに座るのかと、だけど、荷物らしき物は、ほとんどない。着のみ着のままを命じられていたのだから。

しばらくして病身（当時、私はマラリアを患っていた）の私を案じた父が、海を見に行こうと連れ出してくれた。かなりのゆれはあったが、広い海、空気も気持ちよかった。内地へ着くまでこの海の水はこぼれないでいくれるかな、空はどこで内地とつながっているのかな、等を、六歳の私は、どこか滝のように水がこぼれおちていると思い、空は、内地と台湾とで切れていると思っていた。

そんなことを考えている時、ざわめきと共に、戸板様のものが運ばれてきた。白い布がかけられており、泣いている人が、そばから離れずにいた。そして、船べりから海にすべり落とされた。ボチャン、ドボンという前に、フカ、サメが、とびついた。船で死んだ人は海に葬るということを、あとで知った。引揚げ船には、フカ、サメがついてきているのだとも……。病身の私は、内地に着くまでは、船では、ゼツタイ、死にたくないと思ったのだった。高校生になった頃、母に話したとき「あら、知っていたの……」とだけ。

◎その二 引揚げ船を待つ 集結所です。

ここでは、さまざまなおふれが届いた中で「写真に台湾の景色が写っているのは、だめです。すぐ焼くように」とのこと、せっかく持ってきたアルバムから、一枚、一枚、はいで、焚火のように焼いたのです。あちこちに、黙って、時折、あがるほのお。今でも、焚火は、好きになれない私です。

昭和二十年八月九日、六歳の誕生日です。防空壕の中で迎えました。そして敗戦が八月十五日、身辺があふなくなり、現地人の人の好意で田舎に、かくまれ、夜通し見張りをしてもらった日々、日中は外に出ることも、ままならず、きこえてくるのは「日本人がやられた」という声。

住む所もない内地へ引揚げてきたのは、昭和二十一年の六月か七月。四月が小学校の入学のはずでした。

よくぞこれまで生きてこれたものと、大切にすごしていきましょう。今まで、引揚げについて、このように文章にしたことはありません。しかも、今年七十二歳になります。（六回めのえと、うさぎ）

これから何年生きられるか、……。「一度くらい書いてもいいか」と思い応募します。

編集 集 後 記

三月十一日に発生した東日本大震災は、直後大津波が起こり甚大な被害を及ぼしました。

続いて福島県では原発の施設破壊で放射能が洩れる最悪の状況を呈しています。天災と人災が複合して、後者は今も解決の目処が立っておりません。

戦争と同様に年少者、高齢の方々が犠牲者の多くを占めています。特に「原子力発電所の安全」は国民の大多数が信じてきただけに心底から悔まれます。

被害者の方々が一日も早く日常生活を取り戻せますよう祈るばかりです。

戦時体験記録集（第十八集）

編集・印刷・発行

戦争体験を語り継ぐ会

発行年月日

平成二十三年七月二十三日

発行部数

百五十部